昭和48年3月4日発行通巻102号(毎日曜日発行) 昭和48年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

AE 朝日=ラルース

3/4

220円

101

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

目　次

世界動物百科　第101号

表紙　タマシギ（雄）　撮影　上木泰男
表2　**日本迷鳥録**　アネハヅル

監修　森岡弘之（国立科学博物館研究官）
翻訳　大久保敏彦（日本大学講師）

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 35

アネハヅル

Anthropoides virgo



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

日本で記録されているツルは７種ある。タンチョウは北海道釧路で留鳥，マナヅル，クロヅルは鹿児島県荒崎で冬鳥，ナベヅルは同地のほか，山口県八代村でも冬鳥であり，ソデグロヅル，カナダヅル，アネハヅルの３種は迷鳥となっている。これを，北アメリカ全体で２種，ヨーロッパ全体で３種（１種は迷鳥），全世界で14種ということとくらべると，いかに日本はツル天国であるかがわかる。かつての日本では，種類数だけでなく，個体数も多く，特権階級のためとはいえ，手厚く保護されていたのだから，文字どおり天国であった。

アネハヅルは，全長約95センチ，全身灰色で後頭部に白色飾り羽があり，顔から胸にかけては黒い。ユーラシア大陸南部に生息し，日本では，北海道・宮城・伊豆半島・八丈島・愛知・徳之島で各１回，鹿児島で２回，計８回の記録がある。日本が再びツルの天国にもどることを望むのは，ツルだけではあるまい。■

私たちの仲間
101号…3月4日

ピグミーと動物と 上 森の民は歌う

酒井傳六 写真も

1972年7月，わたしはザイール（旧ベルギー領コンゴ）の北東部にひろがるイツーリの森にピグミーをたずねた。わたしがたずねたのは，森の東端のモンオヨに住むエフェ族のピグミーであった。エフェ族はピグミーとして，もっとも純粋性を保っている部族である。狩猟と採集を軸として生きるピグミーの生活と考え方は，エフェ族においてもっとも伝統的な形で生きつづけている。

約10万人が5か国に

ピグミーはザイールにだけ住んでいるのではない。南緯5度から北緯5度にかけての熱帯アフリカの森林がかれらの居住地であり，国名としてあげれば，ザイールのほかに，コンゴ（ブラザビル），カメルーン，中央アフリカ共和国，ガボンの諸国である。その人口は正確には知られていない。というのは，法的にはかれらは居住地の国の国民であるが，登録されてはおらず，人口調査も一度としてなされたことがないからだ。しかし，全体で約10万人というのが妥当な数字のようである。このうち約6万人がザイールに住み，他は約1万人の単位で他の4か国に分布している。

男140センチ以下，女130センチ以下というこの矮人族に，ピグミーという名をつけたのは古代ギリシャ人である。「肘の長さ」を意味する「ピグマイオス」を転化させて「ピグマイオイ」（肘の長さの人）という名詞を古代ギリシャ人はつくった。紀元前8世紀のホメロスの長篇叙事詩『イーリアス』の第3の書の冒頭に，この「ピグマイオイ」がはじめてあらわれている。しかし，それはツルの襲撃を恐れる弱い射手としてのピグミーである。ピグミーの存在がはじめて記録されているのは，それよりずっと古く，古代エジプトの第6王朝（紀元前24世紀）の記録においてである。ここでは，射手としてのピグミーでなく，踊りの名手としてのピグミーが描かれている。古代エジプト人はピグミーを「ディネグ」と呼んだ。矮人という意味のことばであった。

ピグミー自身は，かれらをピグミーとは呼んでいない。こんにちのかれらは居住地で部族を形成しており，その部族名で自分たちを呼んでいる。かれら全体を示す共通の名称をピグミーはもっていない。ガボンにはベクイ族，バボンゴ族，アコア族が，コンゴ（ブラザビル）と中央アフリカ共和国にはバビンガ族が，カメルーンにはバジエリ族が，ザイールにはエフェ族のほかにアカ族，バスア族が住んでいる。もっとも，ザイールの場合だけは，黒人側の用語でピグミー全体を「バンブティ」と呼ぶことがある。

ピグミーの人種学上の起源の問題は解決されていない。しかしピグミー自身は，自分たちをアフリカ最初の居住者の直系であると考えている。ホモ・サピエンスの誕生を5万年前とするならば，ピグミーは5万年前からアフリカに住みつづけていることになる。



弓矢の発明

狩猟と採集は原始人の生活の軸であった。はじめは石と棒だけが狩猟の武器であっただろう。ついで槍があらわれ，投槍機もくふうされた。弓が生まれたとき，狩猟効果は顕著に増大した。

弓が，いつ，どのようにして生まれたか，ということは興味深い問題である。ヨーロッパとアフリカの先史洞窟画・岩壁画は，この問題に対して有効な照明を与えてくれる。ソビエト科学アカデミー版『技術の歴史』（山崎・橋本・小林訳＝東京図書）は，次のように述べている。

「原始時代の発明家は，自然界で起こるすべてのことを注意深く観察して，はじめは，目で見たままを再現しようと努めた。たとえば，たわんだ木の枝がもとの状態にもどろうとするのをよく知っており，この現象を利用して，いろいろなバネ仕掛けのワナをつくった。投げて使う道具（石・棒・槍）の作用や，バネ仕掛けのワナの作用を観察しているうちに，原始人は弓を発明するにいたった。弓と弦と矢は最初の複雑な道具であった。これらは，以前にはつくりだすことのできなかったものである。というのは，これらのものが発明されるためには，長い年月にわたる知識の蓄積と，他の多くの発明が必要だったからである」

「弓の発明によって，人間はまったく新しい力（弾力という隠れた力）を利用することに成功した。中石器時代にあらわれた弓と矢は，17世紀にいたるまで，国によっては，たとえば北国では20世紀にいたるまで，重要な武器であった。人間は弓を使って，100～150メートル離れたところにいる獣や鳥をうち殺すことができた。ときには，矢の飛ぶ距離が900メートルに達することもあった」

「弓矢の出現によって，幼稚な狩猟はいっそう効果的な組織された狩猟へと移り，そのおかげで食用の肉が手にはいりやすくなった。それにともなって，狩猟は基本的な生産部門のひとつになった。原始人は，矢の性能，つまり矢の殺傷力を高めようとして，矢じりを骨や石でつくりはじめた。それには，長さ1～2センチたらずの小さなフリント片が利用された」

「やがてこれらの小さなフリント片は，他の道具にも使われるようになった。そのためには，骨や木の道具に孔があけられ，そこへフリント片が挿入された。この挿入用の石器と矢じりは，原始人の居住地でたくさん発見されているが，学問上は，これを細石器と呼んでいる」

「弓矢が出現し，ついで広く普及したのは，中石器時代と初期新石器時代（紀元前1万2000年から4000年まで）のことである」

だれが最初の弓矢を発明し，製作したのであろうか。ピグミー自身は，それをなしとげたのはピグミーである，と信じている。これを単純な過剰自負心とみなしてはならないであろう。ヨーロッパの先史洞窟画を考証したドイツの民族学者，シュミット神父は，ピグミーこそ弓矢の発明者であり最初の製作者であったと結論した。

動物を狩って5万年

要約しよう。ピグミーは5万年前からアフリカ大陸で動物を追い，1万2000年前から弓と矢で狩猟している，とわれわれは考えてよいであろう。この長い時間のなかで，かれらの生活様式に大きな変化がなかったことを思うなら，ピグミーの動物に関する知識がいかに豊かであり，弓矢の能力がいかにすぐれているかを，われわれは簡単に想像できるのである。いま「かれらの生活様式に大きな変化がなかった」と記したが，唯一の変化は鉄器の導入であろう。ピグミーは長い間，矢じりとして象牙や骨を使っていたが，たぶん5世紀ごろ黒人社会から鉄器を導入した。矢じりが鉄となったとき，矢の効果は著しく大きくなった。しかし，こんにちにいたるもなお，ピグミーは鉄をつくることを知らず，それを習う意思ももっていない。かれらが知らない

ピグミーの住居とその家族





〝森の狩人〟たちの武器は弓矢　弓にはサルの尾で飾りをつけてある

のは鉄器づくりだけではない。陶器をつくることも，織物をつくることも，かれらは知らない。かれらはそれらを必要とするときには，獲物と交換して入手するのである。

狩猟に生きるピグミーは決して固定村落を築くことはしない。獲物の状況に応じて移動しなければならないからだ。かれらは50〜100人の氏族で共同体をつくり，行く先ざきでキャンプを営む。キャンプの期間は短いのは数か月，長いのは数年に及ぶ。家は木の枝と葉でつくる丸天井型で，高さ約150センチ，基底部の直径は約2メートルである。家をつくるのは女の仕事である。かれらはその家のなかで，地面にじかに，あるいは木の葉や枝を敷いて寝る。キャンプを移すのは近くで動物が少なくなったときであるが，それだけが移動の理由ではない。キャンプに死者が出たときもまた，ピグミーはキャンプをよそに移す。キャンプは動物の多い，そして近くに川のある場所に設けられる。アフリカの熱帯雨林には小川が多い。ひとつのキャンプのピグミーが狩猟する領域は，最大限直径100キロの円であり，伝統的にその領域は定められている。

自制する狩猟者たち

アフリカの動物相の豊かさは広く知られている。ユーラシア大陸の動物も，アメリカ大陸の動物も，いく種か見られる。ピグミーが弓矢を使いはじめた大古以来，動物の種類に大して変化は生じていないであろう。それは南アフリカやサハラ砂漠の岩壁画に残っている動物相から推定できることである。19世紀にヨーロッパ人がアフリカに侵入し，銃による狩猟と組織的な捕獲をはじめたことによって，アフリカの動物相がある打撃を受けたのは事実であるが，それでもある種が絶滅するという状態にまでは進まなかった。第二次大戦後，とりわけアフリカ諸国の独立以後，動物の保護体制は強化されている。ピグミーの住む森林地帯ではとくに動物相は豊かである。ピグミーはそれぞれの国の法の規制を受ける建前であるが，事実上は，ピグミーの狩猟の自由は認められているといってよい。それに，ピグミーが狩猟する動物群は小規模なものであり，動物相に変化を与えるほどの荒々しさはそこには見られないのである。狩猟におけるかれらの法は自制の上に成りたっており，そこに森の民としてのピグミーの高貴な個性がある。

みずからすぐれた射手であること，子どもをすぐれた射手にすることはピグミーの最大の関心事である。だから，子守歌は次のように歌われる。

眠りなさい，眠りなさい坊や。
目を閉じなさい，坊や。
夜がきました。眠るときです。
明日はまた陽が昇ります。
眠りなさい，坊や。
暖かいではありませんか。
あなたは明日，大きくなるのです。
あなたは明日，弓と矢を手にするのです。

眠りなさい，あなたは強くなります。
あなたはまっすぐに伸び，
わたしは曲がっていきます。
眠りなさい，坊や。

ピグミーの狩猟する動物は，小はリスからヘビ，ウサギ，サル，アンテロープ，スイギュウ，イノシシ，ライオンをへてゾウにいたるまで多様である。サバンナの大型動物であるキリンは，森のなかにはいない。

ザイールのイツーリの森では，アンテロープが主たる獲物である。わたしはモンオヨのピグミーに同行して狩猟にでたときのことを思いだす。獲物は3頭のアンテロープであった。そのアンテロープは親子であるように見えた。わたしはガイドのオカレに向かって，獲物となった親子のアンテロープをあわれむような感想を述べた。そのときオカレはこういった。「アンテロープが逃げれば，ピグミーには獲物がないということです。ピグミーが気の毒です。ピグミーの狩猟は食うためです。遊びのためではありません」

そうだ。遊びのために動物を殺す文明人のハンターと，生存のために動物を殺すピグミーとは，動物との関係において決定的に違うのである。

ピグミーにとって，動物は生存のための食糧であり，物々交換用の材料である。しかし，ピグミーにとって，動物はそれだけにとどまるものでは決してない。ここにもまた，文明人ハンターとの決定的な違いがある。

ゾウを葬送する歌

動物はピグミーにとって仲間であり，共生者であり，ある意味では精神的存在なのである。とくにゾウの場合に，その考え方は顕著である。

ゾウを殺したあとの歌が，それを鮮明に示している。フランスの民族学者，トリーユ神父の報告によれば，ガボンのピグミーの場合，かれらはまずこう歌う。

われらの槍が方向を誤ったのです。
おお，父なるゾウよ。
われらは御身を殺そうとは思わなかったのです。
おお，父なるゾウよ。
われらは御身に害を加えようとは思わなかったのです。
おお，父なるゾウよ。
御身から命を奪ったものは戦士ではありません。
御身の時がきていたのです。
われらの家を踏みつぶしにこないでおくれ。
おお，父なるゾウよ。

つづいて，ゾウの牙を花で包んだのち，こう歌う。

怒りを感じないでおくれ。
御身の命はこのあと，もっと良くなるでしょう。
御身は精霊の国に生きるのです。
われらの父祖は御身と手をにぎるでしょう。
御身の命はこのあと，もっと良くなるでしょう。
御身は精霊の国に生きるのです。

次に，ピグミーはゾウの生殖器を切りとり，地中に埋めて歌う。

ここに御身は永遠に安らうのです。
このあとは，平和に憩うておくれ。
ここに御身の子どもたちがおります。
御身の怒りを，かれらの上に落とさないでおくれ。

ゾウに勝利した歌

この一連の葬送式歌をゾウのために歌ったのち，酋長はゾウのからだの上に登り，こんどはピグミーのために，次のように歌う。それはゾウをしとめたピグミーの勝利の歌だといってよいであろう。

濡れている森のなかで，
風を受けて，
夜がきた。
空に星がまたたいている。
森の霊がさまよっている。
射手よ，弓をとれ。

おびえる森のなかで，
木々は眠り，葉は死んだ。
サルは木の枝で目を閉じた。
アンテロープは，
音もなく動きだし，
耳を立て，
新鮮な草を食う。
セミは黙り，歌をやめた。
射手よ，弓をとれ。

大雨にうたれた森のなかで，

出猟を前にして　キャンプの広場で腕自慢たちが競射する



父なるゾウは重々しく進む。
おのれの力を信ずるゾウは，
なんの恐れももっていない。
大樹林を押したおして，
ゾウは進む。
ゾウはおのれの妻を求めて進む。
聞け，ゾウの足音が遠くにある。
射手よ，弓をとれ。

御身しか知らぬこの森のなかで，
射手よ，心を奮いたたせて進め。
巨大な肉が御身の前にある。
丘のごとくに進む肉が御身の前にある。
赤い肉が御身の前にある。
射手よ，弓をとれ。

この最後の『ゾウの歌』はガボンにかぎらず，ザイールでわたしが訪ねたモンオヨのピグミーもまた歌う歌である。『ゾウの歌』は独立して，出猟前の，あるいは狩猟後の踊りに和して歌われるようになっている。わたしのたずねたピグミーの活動地域には，もうゾウは見あたらない。しかしかれらは『ゾウの歌』と『ゾウの踊り』をもっとも愛好するのである。かつてゾウ狩りができた日のころ，モンオヨのピグミーもまたガボンのピグミーと同様に，一連の歌を歌ったはずである。2000キロも離れているガボンのピグミーとザイールのピグミーが同じ歌を（違うことばによってではあるが）歌っているということは，かつてアフリカの全ピグミーがひとつの共同体をなしていたことのひとつの証拠であろう。

一連の『ゾウの歌』が意味するものは，なんであろうか。ゾウが仲間の復讐をするということは広く知られている。その復讐を恐れたピグミーが厄除けのためにこのゾウの鎮魂歌を歌うという要素も，この行事には含まれているかもしれない。しかし，ゾウが神に近い存在としてピグミーの神話で語られていることのほうに重要性があることは明らかである。この神話では，ゾウの支配者でありゾウの姿をしているゴルが創造神クヌムの代理者としてピグミーの夢のなかにあらわれ，どこで獲物を見つけ，射ちとめることができるかをピグミーに示すものとして理解されている。つまり，ピグミーが獲物を射ちとめることができるのは，ゾウの支配者ゴルのおかげなのである。

「人間は森の客である」

わたしがザイールのイツーリの森で会ったピグミーの酋長ヌへは，森と人間の関係を次のように語っていた。

◇

森には善い神と悪い神がいる。善い神はベフェギといい，悪い神はロティという。ベフェギは森のなかでピグミーに道を教えてくれる。ロティはピグミーが森のなかへはいっていくと，森から出ていく。ふたつの神は姿をもっていない。ベフェギはときどき不機嫌になる。ピグミーが身がってなことをしたとき，つまり自分が森の主ではなくて客であることを忘れ，その分を越えたとき，ベフェギは不機嫌になる。ベフェギが不機嫌になるとロティが森に帰ってくる。そのとき，森も動物も不幸になる。

森はだれがつくったのでもない。だれもこない前から森はそこにあった。神よりも先にあった。ベフェギもロティも，森のあとに生まれ，森へきた。森の外の世界をつくったのはムドンゴという神である。ムドンゴは森の神々であるベフェギとロティをつくり，人間をつくった。森はムドンゴより先にそこにあった……。

◇

ここに示されていることは，神々とピグミーと動物がともに森という最高存在のなかに包まれているということであり，客としてのピグミーが抑制をみずからに課さねばならないということである。調子にのって必要以上の殺獣をしてはならないというのがピグミーの法である。わたしは実際にかれらの狩猟に同行してそのようすを見た。3頭のアンテロープを射ちとめたあと，酋長は引きあげを命じた。また，帰途，樹上のサルをひとりのピグミーが，明らかにわたしを喜ばすために，射とうとしたとき，酋長がそれをやめよと求めるのを，わたしは見た。


いざ出猟！ 完全装備したピグミー

一方，ピグミーは射ちとめた動物を徐徐に死にいたらしめるのを良しとしている。アンテロープを射ったあと，かれはその獲物が出血と衰弱によって死にいたるのが動物の楽な死であると考えている。とどめの矢を心臓に刺すとか，首をひねって即死させるとかの法をかれらはきらう。徐々に死なせた動物の肉はうまいからだ，と解釈したヨーロッパ人研究者もいるが，わたしの考えでは，ピグミーとしては動物に楽な死に方をさせ，動物に親切を施しているのである。そのとき，動物は単なる肉塊ではなくて，森の共生者として認識されているのである。この，一見矛盾するような心情は，ガボンのピグミーがゾウの死に際して，鎮魂と勝利のふたとおりの歌を歌うのと共通するものを含んでいる。

動物は対等の共生者

ここでわれわれは，イギリスの民族学者，ジェイムズ・フレイザーが『猟師による野生動物の宥和』のくだりで記していることを思いあわせてよいかもしれない（永橋訳『金枝篇』岩波文庫）。

「内住の霊および事実上不滅の霊の理論による生命の解釈は，未開人が単に人間だけでなく一般に生ある存在にまで適用するところである。かれはそうすることにかけては，ふつう自分自身に関して要求する不死の特権を動物には拒否する文明人よりもいっそう寛大であり，おそらくはさらに合理的でもある。未開人は高慢ではない。かれは一般に動物が人間と同様な感情と知性を賦与されていると信じ，また人間と同様に動物が自体の死後までも生存して遊離霊としてさまようか，あるいは動物の形をとって再生する霊をもっていると信じている」

「このように生きているすべてのものを全く人間と同じ立場に置いて考える未開人にとって，ある動物を殺して食べる行為は，動物の知性をわれわれ自身のそれに遙かに及ばぬものと考え，動物が不滅の霊を持ち得ないものと考えるわれわれに，同じ行為が提示するものとは著しく異なった様相を帯びるはずである。ここから，動物を殺す未開人猟師は，その素朴な哲学的理論にもとづいて，自分自身が動物の遊離した霊の復讐の危険にさらされていると信じており，あるいは人間と同じように親縁の絆と血族のための戦いの義務感によって団結していて仲間の一員に加えられた危害に対して憤る義務をもつという同種の他の動物の復讐の危険にさらされていることを信じているのである。したがって未開人は，殺さねばならぬ切迫した理由のない動物，少なくともその種類の一員の殺害に対して血の復讐を強行するような獰猛で危険な動物の生命はとらぬよう心掛けるのが普通である」

ザイールのピグミーの一部が，出猟前に地面にアンテロープの絵をかき，朝日がのぼるときにその絵に向かって矢を射るという習慣のあることを，ドイツの民族学者，レオ・フロベニウスは報告した。それは狩猟の成功を祈るための呪術であると多くの民族学者は解釈した。しかし，フロベニウスの門弟であるアドルフ・イェンゼンは別の解釈をした。それは宗教画であって呪術画ではない，とかれは考えた。われわれもイェンゼンに同意してよいであろう。実際，ピグミーにとって，動物は単なるモノではないのである。■

◇　◇

（筆者は朝日新聞社出版局編集委員。1972年6月から8月にかけて，熱帯アフリカをたずね，諸民族の，とりわけピグミーの生活と文化を取材した）

出猟を前にして　部族がこぞって準備する


アマゾン動物記 13 伊沢紘生



わたしがノートに書いた
アカハナグマのスケッチ

価値のない動物

≪朝の森のなか≫

カケタ河の一支流，ベネージャ川の中流右岸に，ヤシの葉で屋根をふいた簡単な小屋を建てて本調査を開始してから1週間たった日の朝，わたしはひとりで森のなかを歩いていた。早朝から空はきれいに晴れあがり，下ばえの灌木(かんぼく)や草の葉の上で，夜露が木もれ日をはじきかえし，その光のすじのあいだを縫うようにして，ドクチョウやセセリチョウの仲間の幾種類ものチョウが交錯していた。

明けがたからのやかましい小鳥たちのさえずりはもうやんでいた。そしてセミがけだるい単調な声で鳴きはじめるには少し間があった。森のなかの空気はまだ冷たく，さわやかな静けさが支配していた。

ずいぶん歩いた。時計は9時30分を少しまわっていた。そのとき，右手の沼のようになっているそのわきの丈(たけ)の低い木から，茶色っぽい動物が2頭，とびおりたのをかいまみた。

いったいなんという動物なのだろう。そこまで猛然と走った。だがそれより早くやつらは林床をいちもくさんに走って姿を消した。残念なことをした。わたしは沼のほとりで立ちどまり，帰り道を迷わないように，いま走ってきた方向を確認した。

沼のほうで動物のけはいを感じて向き直った。沼の向こうの端近くの大きな倒木の上を，さらに2頭が走り抜けていった。急いであてた双眼鏡にやっとそのひとコマだけが映った。

≪かすかな映像≫

わたしはそのまましばらく目を閉じて，網膜に残ったかすかな映像をいっしょうけんめい鮮明化させることに努めた。

そのとき，少しでも動いたり，別のことを考えてしまうと，映像は簡単にぼけてしまう。それは，朝，目ざめてすぐに顔を洗いにいったり新聞を読んだりしてしまうと，見た夢がはっきり思いだせなくなるあの経験と似たようなものである。

野外での調査では，野生動物に出合えるのは多くは偶然であったし，はち合せになることも多かった。そういうときはいつも一瞬間，ほんのちらっとその動物を見るだけである。

わたしは長い野外調査の経験を通じて，いつの間にか，ちらっと一瞥(いちべつ)した直後のわずかの時間，目を閉じてたたずむ癖がついていた。そうすると，無意識のうちに網膜に映っていたその瞬間の動物の像が，いつもくっきりと頭のなかに焼きつけられてくるものである。

わたしは目を開いて，頭のなかに焼きついた像を，さっきやつらが走り抜けていった沼の向こうの端近くの倒木の上にのせた。頭のなかの映像は倒木の上を走った。「まちがいない」わたしはひとりうなずき，それからノートに絵を書いて，その特徴を列記した。

≪それはクスンベだ≫

そのあと100メートル余り南へいった所でクロクビタマリンの大きな群れに出合い，昼すぎにキャンプにもどった。少しして，朝から道切りをしていてくれたわたしの助手であり，優秀な猟師である現地人のホボらが森からもどってきた。

わたしはさっそくノートに書いた絵を見せた。ホボは，その絵を見るなり，「それはクスンベだ」と人を馬鹿にしたような笑いをうかべて答えた。

わたしはこれまでにクスンベということばを何回か聞いていたが，クスンベと呼ばれる動物は現地人にとってほとんど価値のない動物だということ以外なにも知らなかった。

「きょうは6頭以上いた。クスンベはいつもそうか」

「やつらはふつう10頭から15頭ぐらいの群れをつくって森のなかを歩いている」

「何を食べている」

「ミミズや昆虫(こんちゅう)の幼虫や小鳥などをおもに食べているが，木の実や葉なども食べる」

「クスンベの肉は食べられないのか」

「においがきつくてわたしたちは食べない」

「毛皮はどうか」

「こいつの毛皮は一文の値うちもない」

やはり現地の猟師にとって，クスンベは価値のない動物のようだ。

ホボはこのほかにも，ジャガーやオセロットがクスンベをしばしば襲うこと，またクスンベが木登りも泳ぎもじょうずなことなどを教えてくれた。わたしの見た動物，それはアカハナグマ（*Nasua rufa*）であった。

≪捨て身の恐ろしさ≫

それから10日たった12月8日，わたしは助手のヒルベルトとふたりで，かなり森の奥までサルを捜しに出かけ，ウーリーモンキーの40頭余りの群れに出合い，やつらのさまざまな警戒行動や威嚇(いかく)行動を観察していた。

その最中，200メートルばかり後方から，ヒルベルトの連れてきたイヌたちがやかましく鳴いた。ヒルベルトは，「クスンベだ。へたをしたらイヌがやられる！」といい捨て，マチェテ（山刀）を片手に，声のほうへ走り去った。

ウーリーモンキーはクモの子を散らすように四方へ散っていってしまった。

やがて，かれは1頭の雄のクスンベをぶらさげてもどってきた。その頭と背中はマチェテでもののみごとに割られていた。1頭のイヌは鼻と背中に，もう1頭は左後肢(こうし)に深い傷を負い，鮮血をしたたらせていた。

わたしは，いざとなったときの野生動物の捨て身の恐ろしさを知った。

「わたしがいなかったら，イヌはやられていたかもしれない」とヒルベルトは下げてきたクスンベのペニスから，陰茎骨を抜きとりながらいった。

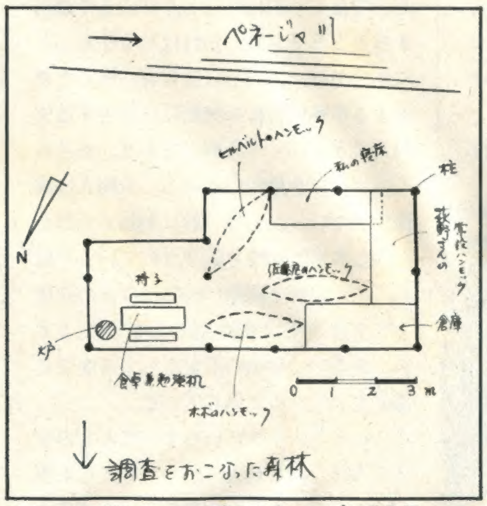
ヒルベルトの引き抜いた陰茎骨は10センチを越えていた。あまりの長さにわたしはびっくりした。

「その骨はなんに使うのだ」

「母親の乳が出ないとき，これをけずって飲ますと，よく出るようになる」ヒルベルトはそう答えてだいじそうにポケットにしまった。

わたしはそのあとも7頭から13頭のクスンベの群れにたびたび出合った。森のなかでは見通しがきかないので，わたしたちの足音に気がつくと，その正体を確かめるためだろう，やつは木に登ってあたりを見まわすのがつねだった。

ホボといっしょのとき，かれはよくからかって，やつらの登った木の下へ突進し，その木の根元をマチェテでたたいた。やつらは木からおりそこなうと平気で15メートルぐらいの高さからでも地面へダイビングして逃げていった。



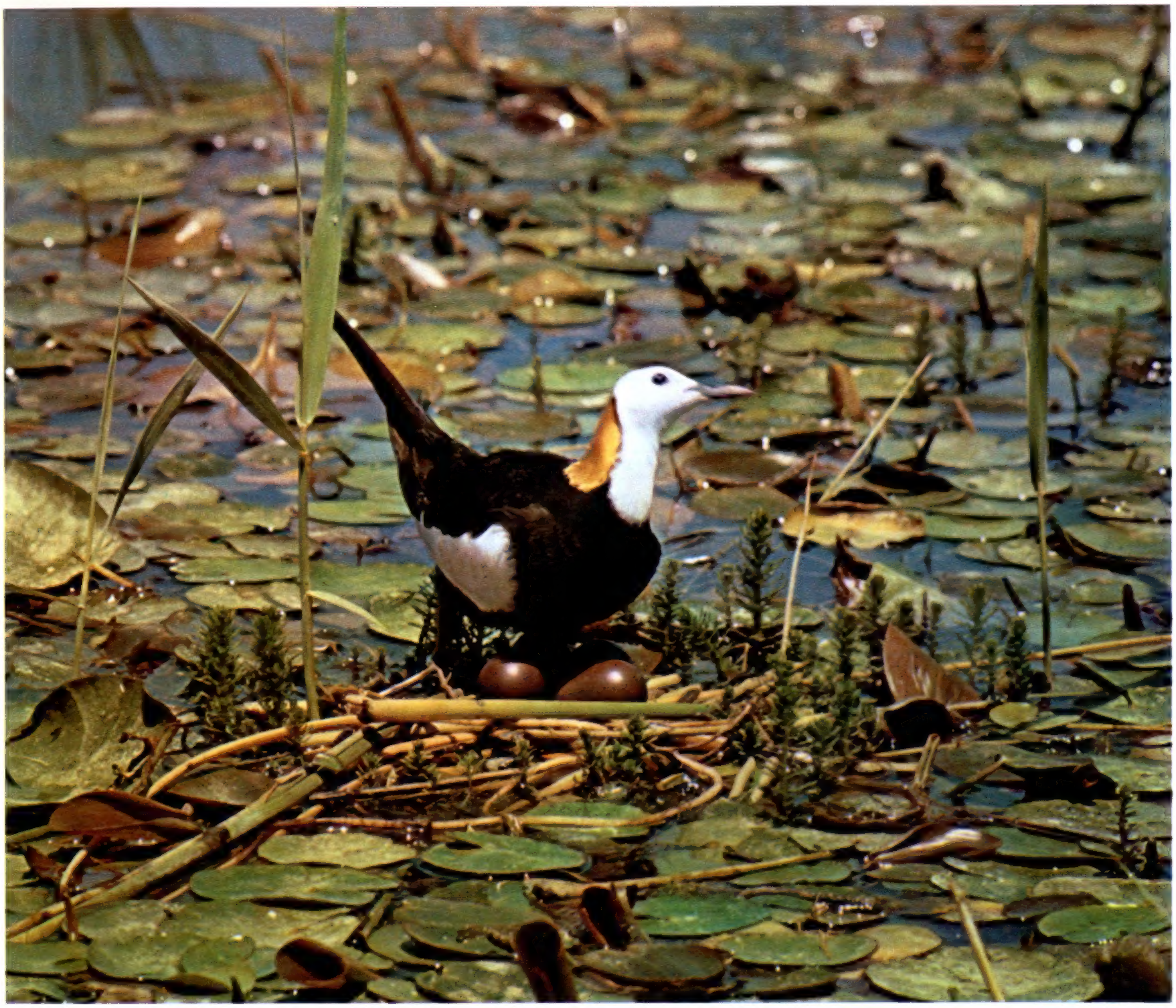
ペネージャ川のほとりに建てたキャンプの見取図



写真は見取図の左側　ホボが食事の仕度をしている
5人が食事をするには食卓はあまりに小さすぎたが
アマゾンの生活ではこれでもぜいたくのうちにはいる
写真左側には
はりに巻きあげられたホボのハンモックが見える

アカハナグマはアライグマ科（*Procyonidae*）の動物で，今話題のジャイアントパンダとは同一の科に分類されている。

またアカハナグマは尾のつけ根にある腺(せん)からにおいを出して，木々にしるしをつけ，群れのテリトリーをきめているといわれているが，それを確かめることはできなかった。■



チドリ目

Charadriiformes

チドリ目は分類学的にみて，スズメ目に次いでもっとも分化の高い目である。この目は16科からなり，約300種の水辺の鳥と海鳥とを含む。これらの鳥たちのなかには，一見したところ類縁がないかのように見えるものもあるが，実際にはいくつかの共通した解剖学的特徴をもっている。つまり，口蓋骨（こうがいこつ）や鳴管（めいかん）の形態，あしの筋肉とゆびの腱（けん）のつき方が，基本的に一致していて，ひとつの目に分類されるのである。内・中・外趾(がいし)の3趾は，たがいに独立しているか，みずかきがついているかしているが，後趾はふつう機能を失っており，退化してなくなったものもある。

チドリ目の鳥の大きさはまちまちで，全長12センチから80センチまでの幅がある。羽毛（うもう）は密生していて，一般に水に強い性質をそなえている。羽色（うしょく）はかなりじみで，白，黒，灰色，茶色のものが多い。雌雄の羽色は，タマシギやヒレアシシギの仲間，エリマキシギなどでは，違いがはっきりしているが，その他の鳥ではだいたい同じである。

くちばしの形やえさのとり方はさまざまで，ヒバリチドリの仲間を除いたすべてのチドリ目の鳥が，主として動物性の食物，とくに水生動物をとる。

繁殖力はかなり弱い。ほとんどの鳥は年に1度しか産卵せず，1腹の卵数はふつう4個を越えることはない。ひなは抱卵(ほうらん)期間が長いせいか，一般に非常に早熟である。寿命は長いほうで，繁殖期以外は群れで暮らしているが，繁殖も集団でするものが少なくない。

分布は広く，極地をも含めた世界全域に及んでいる。

チドリ目は，ふつう3つの亜目に分けられる。チドリ亜目，カモメ亜目*Lari*，ウミスズメ亜目*Alcae*である。

チドリ亜目はいちばん大きく，12科から成り，小型と中型の水辺の鳥類が集められている。これらの鳥は，だいたい湿地や湖，川，海岸などの近くにいるが，砂漠(さばく)や高山にすむものもある。

カモメ亜目には，スマートな体形と強いつばさをもつ，飛行術に巧みな鳥が3科含まれる。この仲間は，アジサシ類のあるものを除けば一般に海鳥である。

ウミスズメ亜目に属する科は，ウミスズメ科だけである。この科の鳥はみな，潜水が巧みな海鳥で，その形態は一見ペンギンに似ている。しかし，ペンギンが南半球にのみ生息しているのに対して，ウミスズメの仲間は北半球にしかすんでいない。

レンカク。レンカク科レンカク属。
巣は浮き葉漂う水面につくられ
洋梨型をした暗褐色の卵が4個産み落とされる。
抱卵とひなの世話は，おもに雄の役目。
成鳥の羽色になるにはふつう2年かかる。
PH. P. JACKSON

チドリ目

亜目	科	属
チドリ亜目	レンカク科	アメリカレンカク属，アフリカレンカク属*Actophilornis* レンカク属*Hydrophasianus*，トサカレンカク属*Irediparra*
	タマシギ科	タマシギ属，ナンベイタマシギ属*Nycticryphes*
	ミヤコドリ科	ミヤコドリ属
	チドリ科	ケリ属，ムナグロ属，チドリ属，オオチドリ属*Eupoda* コバシチドリ属*Eudromias*，ハシマガリチドリ属*Anarhynchus*
	シギ科	ダイシャクシギ属，オグロシギ属，クサシギ属 ハジロオオシギ属*Catoptrophorus*，キアシシギ属 ソリハシシギ属，キョウジョシギ属，オオハシシギ属 タシギ属，ヤマシギ属，コシギ属，オバシギ属 キリアイ属，ヘラシギ属，コモンシギ属*Tryngites* エリマキシギ属
	セイタカシギ科	トキハシゲリ属*Ibidorhyncha*，セイタカシギ属 ソリハシセイタカシギ属
	ヒレアシシギ科	ヒレアシシギ属
	ヒバリチドリ科	ヒバリチドリ属
	カニチドリ科	カニチドリ属
	イシチドリ科	イシチドリ属
	ツバメチドリ科	スナバシリ属，ワニチドリ属，ツバメチドリ属
	サヤハシチドリ科	サヤハシチドリ属
カモメ亜目	トウゾクカモメ科	トウゾクカモメ属
	カモメ科	カモメ属，ミツユビカモメ属，クビワカモメ属*Xema* アジサシ属，インカアジサシ属*Larosterna*，クロアジサシ属
	ハサミアジサシ科	ハサミアジサシ属
ウミスズメ亜目	ウミスズメ科	オオウミガラス属，オオハシウミガラス属，ウミガラス属 ヒメウミスズメ属*Plantus*，ウミバト属*Cepphus* マダラウミスズメ属*Brachyramphus* ウミスズメ属*Synthliboramphus* エトロフウミスズメ属*Aethia*，ウトウ属*Cerorhinca* ツノメドリ属，エトピリカ属*Lunda*

この表はすべてのチドリ目の属を網羅したものではなく，代表的なものだけをあげた。
学名を併記してあるものは，本文に見出しがないものである。



レンカク科の分布。6属7種が含まれ
赤道周辺の，熱帯と亜熱帯地方に生息する。
繁殖期にはつがいでいるが
それ以外のときには，小さな群れをなしている。

チドリ亜目 *Charadrii*

チドリ亜目の鳥は，全部が地上性で，巣も地上につくり，おもに水ぎわにすむ。見通しのきく開けた場所にすんでいるため，からだの色はふつうじみで目だたなくなっている。一見はでな模様のあるものや美しい色のものもあるが，それも生息場所のまわりの環境と溶けあって，実際には隠蔽色になっているのである。

また，集団かそれに近い状態で生活していて，外敵を早く発見し，たがいに警報しあって協同で追いはらうこと〔注1〕や，擬傷の動作で，巣に近づく敵を欺くことなどの防衛行動が発達している。

外形はさまざまで，いろいろなくちばしやあしのものがある。

この亜目の鳥は多くの場合，夏〔繁殖期〕と冬〔非繁殖期〕とでは羽色が違う。

レンカク科 *Jacanidae*

レンカク科（チドリ亜目）の鳥は，ゆびとつめが非常に長く，とくに後趾のつめが著しく発達している。それにバンを思わせる額板〔額の上の楯型をしたもの〕をもち，翼角（よくかく）部〔つばさの手首にあたる部分〕につめがある。このつめは，闘争のとき武器として使われる。レンカク類はすべて池や沼にすみ，水面に浮かぶスイレンやヒツジグサ，その他の水生植物の大きな葉の上が，1年を通じてのかれらのすみかである。

レンカクは，この水生植物の葉の上を，1歩ごとに尾を振りながら身軽に歩きまわる。これは，レンカク類だけに授けられた特技で，レンカクほどの大きさをもつ他の鳥には，決してまねのできないことだろう。この特技の秘密は，そのあしゆびの長さにある。つまり，極端に長いあしゆびを開くと，体重が浮き葉の表面に分散され，鳥が歩きまわっても体重で葉が沈むことはないのである。

しかし，まったく特殊なこの環境を離れると，この鳥の動作はぎごちなく無器用になり，丈の高い草のあいだでは身動きがとれなくなってしまう。その反面，かなりじょうずに飛びもするし，泳ぎもうまい。それに危険が迫ると水中にもぐる術も心得ている。とくにひなたちにとっては，この潜水が外敵からのがれるための常套手段である。

ふつうは留鳥（りゅうちょう）であり，昆虫（こんちゅう）やさまざまな小型の水生動

物，それに植物の種子を食べる。沼地のしじまを破ってときおり響きわたるその鳴き声は，かん高い笑い声に似ている。

羽色は雌雄とも同じだが，からだはふつう雌のほうがいくらか大きい。

繁殖期にはつがいで生活する。その他の時期にはだいたい小さな群れをなしているが，ときにはいくつかの種のレンカク類がいっしょにいることさえある。繁殖期を過ぎるとかなり遠くの沼や池に飛んでいくこともある。

巣は浮き草の上につくられ，そこに洋梨型をした，光沢のある暗褐色の卵をふつう4個産む。抱卵と育雛（いくすう）は主として雄の役目である。一妻多夫の場合もある。

レンカク科の鳥は，メキシコからアルゼンチンにかけての中央・南アメリカ，サハラ砂漠以南のアフリカ，マダガスカル，アジアの南・東南部，それにフィリピンからニューギニアおよびオーストラリア北部まで分布する。

アメリカレンカク

Jacana spinosa

アメリカレンカク（アメリカレンカク属）は，全長が約25センチ。羽色は頭とくびと腹とが黒，背とわき腹とつばさとが赤みをおびた褐色で，つばさには黄色の大きな斑点がある。額板は赤く，あしゆびは非常に長い。

メキシコからウルグアイおよびアルゼンチンにかけてと，西インド諸島に生息し，これらの地域では，池や沼でもっともふつうに見られる鳥のひとつである。

人家の近くの沼に好んですみつき，その長いあしゆびを生かして，浮き葉の上を敏捷に歩きまわり，いつでもたいそうせわしげにしている。しかし，小舟などが近づくと，目だたないようにその場にじっとして，危険がなくなるまで待っている。飛び方は，長いあしをまっすぐ後ろにのばし，直線的に飛ぶ。

飛行するときに，笑い声に似た鳴き声をたてるが，ふつうそうやかましい鳥ではない。とくに繁殖期が終わるとほとんど鳴かなくなる。危険を感じたときにだけ，長い首をのばしてかん高い鳴き声を響かせる。この警戒の声を聞くと，仲間もそれに呼応しながら逃げだす準備を始める。

アメリカレンカクのおもな食べ物は，水中の昆虫とその幼虫だが，植物の種子も食べる。

雨期が終わると繁殖期にはいる。巣はきまって沼や池の縁につくられ，水草を寄せ集めた簡単なものである。巣づくりは，雄も雌もするが，おもに雄の役目のようだ。1腹の卵数はふつう4個で，卵には黒く細い縞模様がある。ふつう抱卵期間は22～24日で，雄が一手に引き受ける。ひなは，生まれたときすでにゆびやつめがじゅうぶん発達しており，親のあとにくっついて，浮き葉の上を歩きまわることができる。

レンカク科には6属7種があるが，習性はだいたいアメリカレンカクと同じである。

アフリカレンカク *Actophilornis africana*（アフリカレンカク属）は，全長が約30センチ。サハラ砂漠以南のアフリカのほとんど全域に分布する。額板が青いのが特徴。

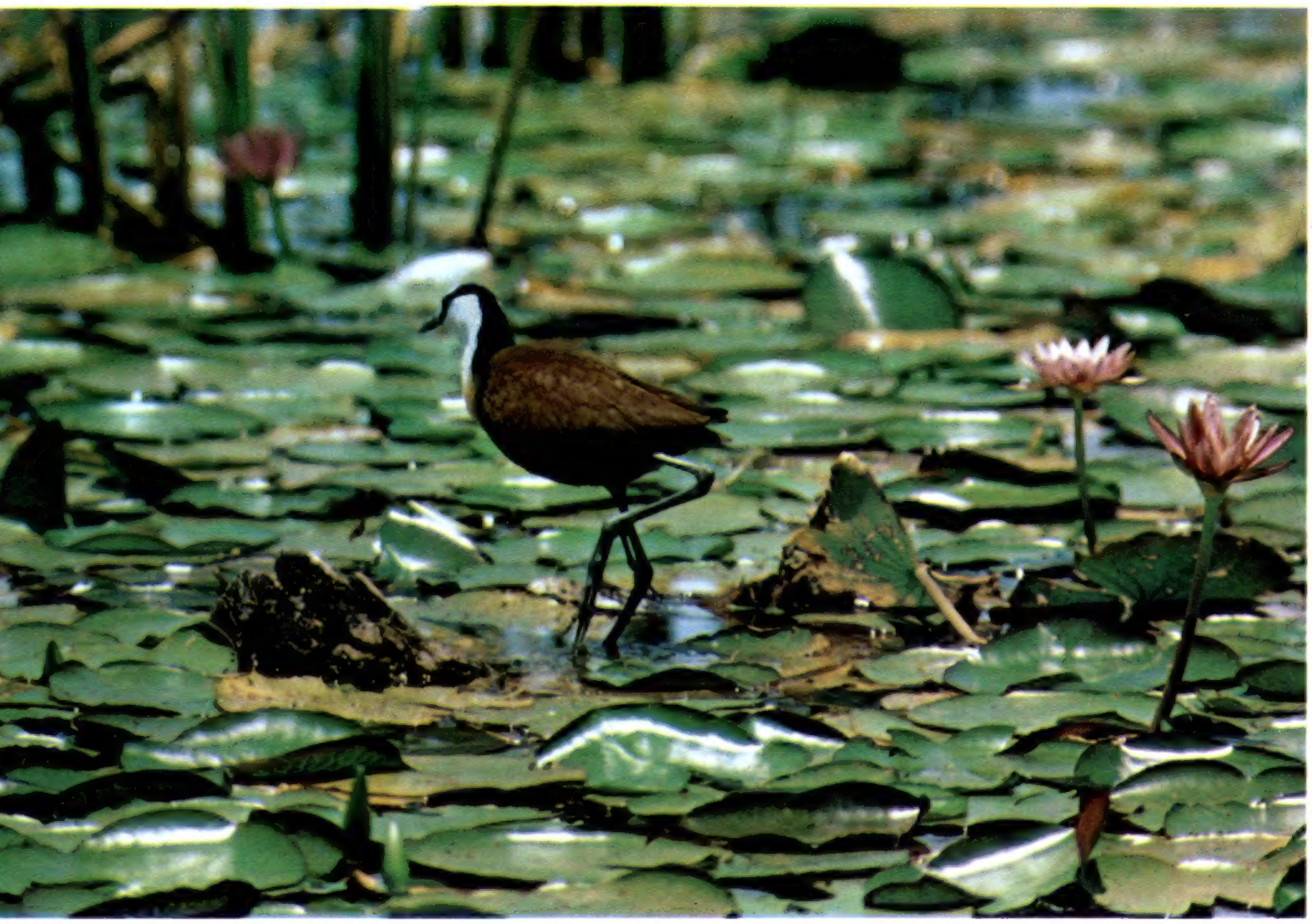
レンカク *Hydrophasianus chirurgus*（レンカク属）は，インド，中国南部，台湾からフィリピンにまで分布する。尾が長く，全長は50センチにも達し，その姿は一見キジに似ているところがある。また，後頸（こうけい）が黄金色であることも特徴のひとつである。この鳥は，日本でも3回〔福岡県・茨城県〕，迷鳥として記録されたことがある。

トサカレンカク *Irediparra gallinacea*（トサカレンカク属）は，インドネシア，ニューギニア，オーストラリアに分布する。頭部に赤いとさか状の肉冠（にくかん）がある。



アメリカレンカク。
レンカク科アメリカレンカク属。
異常に発達したこのあしゆびのおかげで
浮き葉の上を歩くことは自由自在なのだが
かたい地面の上となるとまったくぎごちない。
PH. R. THIBOUT-JACANA







アフリカレンカクとそのひな。
レンカク科アフリカレンカク属。
「お父さん，何してるの」
「いや，この自慢のあしゆびをね
写真に撮ってもらっているのさ」（上）

PH. G. D.PLAGE–BRUCE COLEMAN LTD.

アフリカレンカクは全長が約30センチ。
えさを求めて１日じゅうせわしなく歩きまわる。
水中の小さな昆虫類やその幼虫がおもな食べ物で
植物の種子を食べることもある。（下）

PH. P. SUMM–JACANA



アフリカレンカクにとって
ヒツジグサやスイレンの大きな葉の上が
1年を通じての安住の地。
危険を感じると長いくびをのばし
かん高い声を響かせて，水中にもぐってしまう。

PH. FIEVET-JACANA

101－5



タマシギ科　*Rostratulidae*

タマシギ科（チドリ亜目）には２属２種が含まれる。そのひとつはアフリカ、マダガスカル、アジアの温帯と熱帯、オセアニアに、もうひとつは南アメリカに生息している。

この２種のタマシギは、分布域を異にしているにもかかわらず、驚くほどの共通した解剖学的特徴と、独特の繁殖習性とをもっている。解剖学的な面からいえば、気管の形が雌雄で著しく違っていることである。雌の気管は長くうねったパイプになっているが、雄のほうは短くてまっすぐである。この相違は実際には、鳴き声の違いになってあらわれる。雌の鳴き声はしみ入るような高い調子だが、雄のほうは低いつぶやきのような声である。

タマシギ科の鳥は，雌雄の羽色が違う点でもシギ科やチドリ科の鳥と異なる。雌は雄より羽色がずっと美しく、からだも大きい。

沼のアシのあいだや水田などに、単独あるいは小グループですんでおり、留鳥である。

タマシギ

Rostratula benghalensis

タマシギ（タマシギ属）は全長約50センチ。雌の背面は緑がかったブロンズ色で、ふぞろいな黒い縞が走り、後頸にV字型をしたくり色の模様があり、胸もくり色である。雄は、背面が灰色がかった緑褐色で，胸にくり色はなく、全体にじみな色彩である。腹と目の後部は雌雄ともに白い。

分布は広く、アフリカ〔サハラ砂漠以北を除く〕，アラブ、小アジア、それにインドから中国と日本までのアジア南部と東部，インドネシア、オーストラリア、タスマニアなどである。日本は分布の北限であるが，本州中部以南ではかなりふつうに繁殖する。

タマシギは、定期的な渡りを行なわない。沼や池のほとりにすんでいるが、ヤブやアシの茂みのなかにいることもある。日本や中国では、水田がおもなすみ場所になっている。

食べ物は，土のなかにすむ昆虫，ミミズ，小動物，それにいろいろな植物の種子である。

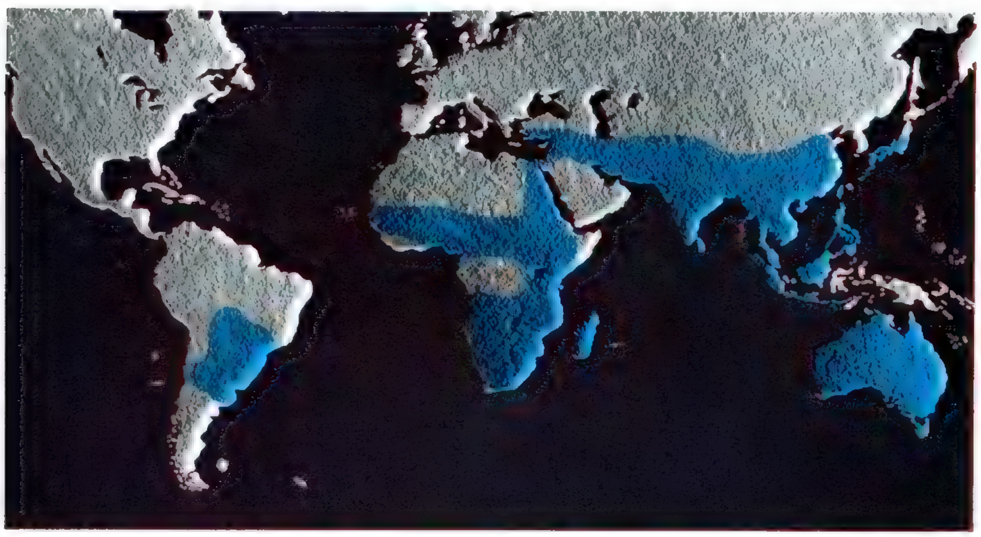
つがいは繁殖期の前にできるが，雌雄がいっしょにいるところはめったに見られない。繁殖期以外には，10～12羽の群れをつくって湿地のなかをあちこち歩きまわっている。もっぱら夕暮れから夜にかけて活動し，警戒心も強い。地上での動作は非常に機敏だが，飛ぶのはおそく，あまり好まない。クイナのようにゆっくりしていて，遠くまで飛ぶことはなく，ふつうは舞いあがっても，またすぐくさむらのなかにもぐってしまう。

雌の鳴き声は笛のような強い音で，「コーッ，コーッ，コーッ」と聞こえる。繁殖期になると，夜明けや夕暮れどきによく鳴く。また，「ギッ，ギッ，ギッ」という声も出す。

タマシギのもっとも変わった点といえば，雌雄の役割がふつうの鳥と反対なことである。繁殖期になると，雌はテリトリー（なわ張り）を確保し，雄をめぐってライバルと戦う。このとき雌は，つばさを大きくひろげ，それをくちばしの先よりも前に突きだして，尾はいっぱいに開き，威嚇の態度を示す。

巣をつくるのは雄である。地面が乾燥しているときは，簡単な凹みをつけるだけで，雌は地面に直接卵を産む。湿りけが多いときには枯れ草を敷いて巣をつくり，産卵する。１腹の卵数はふつう４個で，緑がかった黄色の地に焦茶色の斑点があり，楕円形をしている。雄は19日間抱卵し，ひとりでひなを育てる。雌はふつう，自分のテリトリーに数羽の雄をしたがえて，テリトリーを守る以外は卵を産むことしかしない。この一妻多夫は日本やインドの亜種だけで，アフリカやオーストラリアでは一夫一妻のようだ。

ナンベイタマシギ *Nycticryphes semicollaris*（ナンベイタマシギ属）は，南アメリカの中央部にすんでいる。全長が約25センチで，タマシギの半分ほどの大きさである。しかし，羽色や習性は，タマシギと非常によく似ている。繁殖習性もタマシギとだいたい同じであるが，ナンベイタマシギは１腹の卵数がふつう２，３個で，雌がおもに抱卵するようだ。



タマシギ（雌）　タマシギ科タマシギ属。
雌雄の役割が，ふつうの鳥と逆である。
雌はディスプレーを行ない，仲間と争い
多くの雄をもつ。一方雄は巣をつくり，抱卵し
ひなを育てるという奇妙な習性がある。（上）
撮影　上本春男

タマシギ科の分布。２属２種が含まれ
ひとつはアフリカ，マダガスカル
アジアの温帯と熱帯，オセアニアにまで
もうひとつは，南アメリカのチリ，パラグアイ
ブラジル，アルゼンチンのそれぞれ一部に生息。



ミヤコドリ科

Haematopodidae

ミヤコドリ科の鳥は，チドリ亜目のなかでは大型のほうで，全長は40～50センチにも達する。くちばしは長く，先端が丸みをおび，縦に扁平で，カキの殻をあける小刀のような形をしている。このくちばしは，とても便利な道具で，これを使いイガイ，ザルガイ，その他さまざまな貝の殻をあけて食べるのである。貝が口をあけるほんのわずかな瞬間をとらえて，そのすきまにくちばしをさし込んでひねり，簡単にふたをこじあけてしまう。種名の*ostralegus*も"貝を集める"という意味である。このくちばしはまた，カサガイを岩からはがしたり，小さなカニを殺したり，水底のどろのなかをつついて虫を取りだしたりするのにも役だつ。

分布は，地球上のほとんど全域に及んでいるが，極地とポリネシアの島々にはいない。しかし，その広い分布にもかかわらず，特殊な食性のため，ヨーロッパを除いてはあちこちでその数が減少し，珍しい鳥となっている。

この科には，ふつう1属6種が分類され，6種ともその外形は非常によく似ている。羽色は，からだの上面が黒く下面が白いものと，全体が黒いものとのふたつがある。くちばしとあしが赤く，鋭い口笛のような鳴き声をたてる。巣はわずかの草を敷くだけで，地面にほとんどじかに産卵する。飛行は直線的で力強い。

ミヤコドリ

Haematopus ostralegus

ミヤコドリは，この科の代表的な種で全長が約50センチ。頭部とのどと背中が黒く，腰と腹と尾羽（おばね）の基部とが白い。目のまわりはあざやかな赤で，くちばしがオレンジ色，あしはピンクである。

ヨーロッパ，小アジア，アジア東部などの沿岸に生息しており，とくに岩礁や砂利の多い海岸を好むようだ。また，中央アジア（トルキスタン）などにも生息しているが，他の地方では海岸近くにだけすむという習性の鳥が，このような内陸にいるということはちょっとしたなぞである。スウェーデンの鳥類学者レンベリー博士の説によれば，大昔この地方が海であったころにいたものが，そのまま生き残っているのだろうということである。

ふつう漂鳥で，繁殖地を離れないものもいるが，北ヨーロッパのものは，冬に地中海や紅海，ペルシャ湾など，南部に移動するようだ。この移動期には，比較的大きな群れで海岸近くにいる。陸地の奥まではいってくることは少ない。

かつては，日本にもかなり渡来したようだが，近年では非常に珍しいものとなっている。もっともアジアでは，ヨーロッパのようにたくさんのミヤコドリが繁殖しているところは

[illegible]
[illegible]になると海岸に集まり
大きな群れになって南の暖かい地方に移動する
かつては，日本にもかなり渡来したようだが
今では非常に珍しい鳥になっている。
PHIL HOSKING



なかったらしいが、『伊勢物語』に、《名にしおはば　いざこと問はむ　都鳥　わが思ふ人は　ありやなしやと》と詠まれている"都鳥"は、このミヤコドリではなくカモメ科のユリカモメ *Larus ridibundus* という鳥のことである。それがいつの間にか都鳥はこのミヤコドリのほうの名まえになったらしい。

食べ物は、ミミズ類、甲殻類、昆虫類、軟体動物（とくにイガイ、ザルガイなどの二枚貝類とカサガイなど）、ウニ、海岸の岩場や砂地にすむきわめて多様な小動物などである。

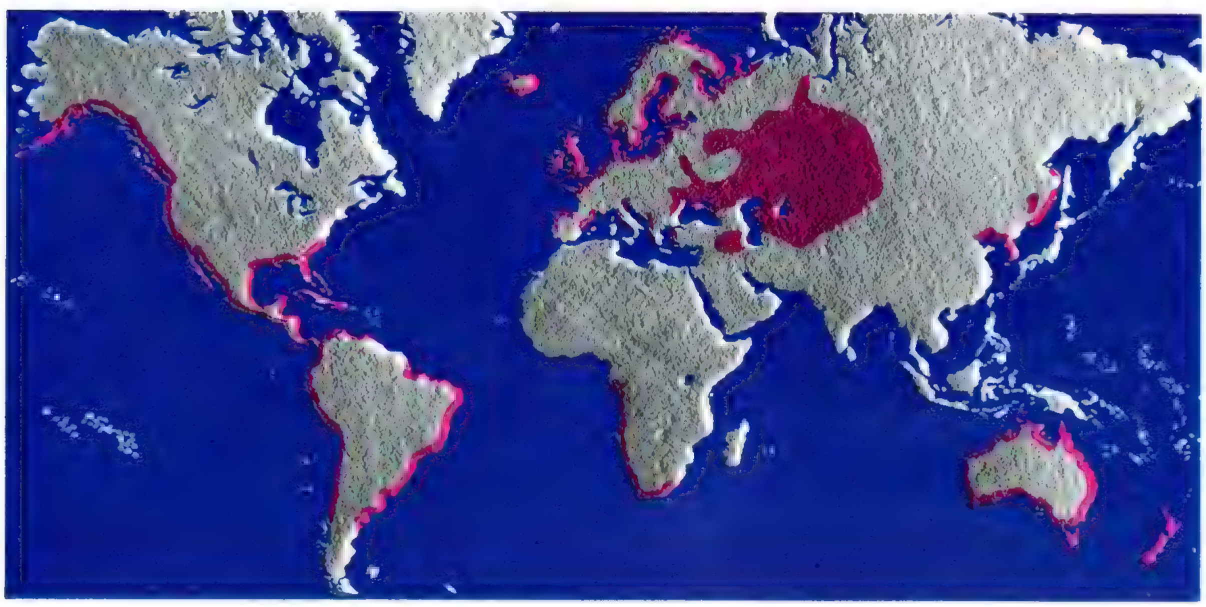
イギリスには土着のミヤコドリがたくさんいるが、毎年冬になると、スカンジナビア半島から渡ってくるものがあって、それらを合わせるとたいへんな数になる。ウォールズ地方の南部では、月によって異なるが、5500〜1万5800羽の大群が見られるほどである。そこで鳥と人間とが貝類を奪い合うことになる。

ミヤコドリは美食家で、イギリス人たちが珍重しているザルガイ、それも2年たった大きなものを、かたっぱしから食いあさる。だからその被害は、漁師にとってもばかにならないのである。ミヤコドリは、潮が引いている間の約半分の時間、貝を食べつづけるわけだが、1回の引き潮の間に1羽が食べる量は、貝の大小によって差はあるが、200〜600個にのぼる。したがって、2年以上たった貝の被害総数はウォールズ地方の南部だけでも、3年間に5億5700万〜12億3700万個に達する。この地方で、同じ期間に人間の食糧として採取されるザルガイの数、4600万〜1億2800万個と比較すると、その数がいかに大きいかがわかる。だからイギリスでは、漁師たちとミヤコドリの保護者たちとのいざこざが絶えないのである。

ミヤコドリは歩くのも小走りに走るのもうまい。ゆびが長いので、どんなぬかるみのなかでも自由に動きまわることができ、泳ぎもお手のものである。必要とあればたいへん速く飛ぶこともでき、飛び方は力強く優雅でさえある。

この鳥は、「ピッ、ピッ、ピッ」と大声でよく鳴くほか、「キュリー、キュリー」という声もたてる。

ミヤコドリは繁殖期の奇妙な行動によってとくに注目されている鳥である。若い鳥たちは最初、雌雄入りまじった集団で生活しているが、やがて厳密な一雌一雄に移行する。このとき雄は、雌をめぐって争うのだが、それはふつうの鳥がやるような戦いによってではなく、一種の集団ダンスによって勝敗が決め



抱卵するミヤコドリ
敵に巣を発見されたと感じると
卵を安全な場所に移すおもしろい習性をもつ
巣は海岸の凹みを利用した簡単なもので
小石や柔らかい枯れ草などが敷かれている（上）
PH. E. HOSKING

ミヤコドリ科の分布
この科には6種が含まれ、ほぼ世界全域にすむ
ふつう海岸近くが生息場所なのだが
中央アジアの平原にもすんでおり
このことは生物学上のなぞになっている

アフリカレンカクとそのひな
ひなは、孵化したときからすでに
あしゆびがじゅうぶんに発達しているので
親鳥について浮き葉の上を歩くことができる
また、水にもぐるのがとてもじょうずだ（右）
PH. G. D. PLAGE-BRUCE COLEMAN LTD











られる。まず数羽の雄が一列に並んで輪をつくる。そして、くちばしを地面に向けて突きだし、かん高い鳴き声を発しながら並んで走りだし、順番にお目当ての雌の前でディスプレーを行なう。ライバルのうちの1羽が順番を待ち切れず仲間より早く出ようとすることがあるが、そのときには順番に当たる雄が、割り込み者のしぐさのまねをする。これは割り込み者をたしなめる行動らしく、その不心得者はすぐに引きさがる。雌は、はじめのうちはたいそう気が多く、数羽の雄の申し込みを受け入れるが、結局はその翌日に1羽の配偶者を選ぶ。こうしてできたつがいは、数年の間、結ばれているようだ。

産卵はふつう5月に行なわれる。巣は雌がつくるが、海岸の凹みを利用した簡単なもので、小石や貝殻の破片、柔らかい草などが敷かれている。1腹の卵数は3、4個で、卵は錆色をしており、濃い色の斑点がある。抱卵期間は24～27日で、おもに雌の仕事だが、雄もかなり手助けをする。ひながかえると、親は協力して子どもを育てる。

ミヤコドリは、巣が人間などに見つけられたと感じると、卵を安全な場所に移動させる珍しい習性がある。雌は卵をひとつずつ両足のあいだにはさんで、いかにも“どっこいしょ、どっこいしょ”といった感じで動かしていく。また、不意に略奪者が現われたりすると、ただちに警報の鳴き声を発して仲間に知らせる。すると、近くに営巣（えいそう）している仲間が駆けつけてきて、闖入者を攻撃しはじめる。一方親鳥は、傷ついたふりをしたり〔擬傷〕、巣が他のところにあるようなふりをしたりして、敵を巣から遠ざけようと努める。ひながかえっていると、ひなは地面に張りついてピクリとも動かず、敵に発見されることも少ない。これらの防衛行動は、巣が地上にあるこの鳥にとって、ひなを守る最良の手段なのである。

ミヤコドリは、からだの割りには寿命が長い。36年も生きた例があり、野生の状態でも20年以上生きた例が報告されている。

抱卵するケリ　チドリ科ケリ属
地面の凹みに、枯れ草や小枝を敷いた簡単な巣
そこへ、3月の終りごろまでに4卵を産む。
抱卵期間は約27～30日で、雌雄交替で行なう。
見通しのきく広い農耕地にすむ。〔101－10〕
撮影　[illegible]

抱卵するイカルチドリ　チドリ科チドリ属
川の中流・上流の河原や湖のまわりに営巣する
アジア東北部の特産種で、日本では
本州と四国に繁殖の記録がある。〔101－11〕
撮影　[illegible]

ミヤコドリの長く、縦に扁平なくちばしは
貝殻をこじあけるのにうってつけ。
何よりの好物はイガイ、ザルガイなどの貝類で
ヨーロッパではその被害もばかにならず
漁師と保護者との争いが絶えない。（左、上）
PH. G. QUEDENS（左）　撮影　竹丸勝朗（上）

チドリ科　*Charadriidae*

チドリ科（チドリ亜目）の鳥は，次のような外形的特徴をもっている。

- 全長は12～40センチ。
- 雌雄の羽色（うしょく）はほとんど同じ。
- 体形は一般にずんぐりしていて，頭と目が比較的大きい。
- くちばしは比較的短く，先端がふくらみをもっている。〔注2〕
- 跗蹠（ふしょ）はかなり長く，後趾（こうし）がない〔ただしダイゼンには後趾がある〕。

この科には約60種が分類されており，その分布は，極地を除いたほぼ世界全域にわたっている。大部分は海岸地方や平野部に好んですんでいるが，山地にすむものも少なくない。冬の寒さが厳しい地方で繁殖するものは，ほとんど全部が渡り鳥である。

タゲリ　*Vanellus vanellus*

タゲリ（ケリ属）は全長が約32センチ，体重が約240グラムの鳥である。背中は金属光沢のある暗青緑色で，胸が黒く腹は白い。頭の後ろの部分の羽毛（うもう）が長くのびて冠羽（かんう）になっている。

いつも少数あるいは多数の群れをなして暮らしており，じめじめした草原や沼地，海岸，耕地などにすんでいる。

イギリスからアジアの北部にいたるユーラシア大陸の温帯と亜寒帯地方に分布する。ヨーロッパでは，地中海の沿岸と北極圏を除くほとんどすべての地方で営巣（えいそう）する。アジアではモンゴル，中国の東北部で繁殖している。日本での繁殖はまだ確かめられていないが，冬鳥としてふつう11月ころ渡来し，翌年の3月ころまでの間，取入れの終わった水田や畑，塩田などでよく見かけられる。和名のタゲリ（田鳧または田計里と書く）は，たんぼのケリの意味である。

タゲリはふつう漂鳥である。つまり，規則的な渡り鳥ではないが，冬にはヨーロッパ北部と東部の繁殖地を離れ，もっと気候の温暖



抱卵するタゲリ（チドリ科ケリ属）。
オランダなどでは，繁殖期はじめの一定期間中にその卵を食用として採取することができる。
卵をとられた親鳥はすぐ新しい巣に産卵するから繁殖にはさしつかえないという。（上）
PH. BAVAREL

タゲリ。日本では繁殖が確認されていないが10月の末から12月はじめに渡ってきてかりとれのすんだ水田にいるのが見かけられる。警戒心が強く，近づくとすぐ飛びたってしまう。ふわふわした飛び方は，この鳥独特のもの。（右上）
PH. E. HOSKING

セグロツメハゲリ。チドリ科ケリ属。
この名まえは，背中が黒いことと翼角につめが発達していることからきている。
水たまりの柔らかいどろを突っついてはミミズ類や昆虫，軟体動物を食べている。（右下）
PH. BAVAREL

な西部と南部，ときには北アフリカにまでも移動する。

比較的臆病な鳥で，ふつう人のすむ地域は避ける。飛ぶときは，つばさの動かし方がゆるやかで，まるでチョウが舞うようにかろやかに飛ぶ。そして，舞いあがるときや飛んでいるときに「ピューイ」という鳴き声を響かせる。「ピリューイ」と長くのばして鳴くこともある。

食べ物はたいへん多様だが，その90パーセント近くが動物性のもので，残りは植物性のものである。とくに昆虫（こんちゅう）類，ミミズや地表にいる軟体動物を好んで食べる。

3月にはいると，タゲリは多くの群れをなして営巣地に集まってくる。集団では繁殖しないが，だいたいかたまって巣をつくり，20～30メートルのところに，3つも4つも巣がある。タゲリたちは何日かの間はグループをつくったままだが，まもなく個々の巣に閉じこもりはじめる。雄は，自分のテリトリー（なわ張り）をいっしょうけんめい守るが，そのテリトリーは狭く，巣のごく周辺のみである。





つがいになるとき、雄はディスプレーのための空中妙技を披露する。雄は2，3回ゆっくり羽ばたいて地上から舞いあがり、それからしだいに速く羽ばたいて空中をほとんど垂直に飛びあがる。そして急にひらひら舞いながら急降下して、地面すれすれのところでとんぼ返りをするのである。ディスプレーの合い間に雄は自分で決めた地点にいき、うずくまり、あしで地面を引っかいて凹みをつくる。そして、小枝を集めてきては、掘ったばかりの凹みの横に置く。

雌は、はじめのうちは関心なさそうなようすで雄のすることをながめているが、やがて自分も地面を引っかきはじめ、雄と同じことをするようになる。そのうちあたりには、狭い間隔でいくつかの凹みができ上がる。凹みがつくられる場所は、ふつう低い草におおわれた湿気の多いところで、まわりより比較的小高くなっている地点が選ばれている。

3月の終りになると、雌はディスプレーのときにつくられたいくつかの凹みのなかからひとつを選択し、草や小枝を敷きつめて巣を仕上げる。そしてそこに、黄色がかった地に大きな黒い斑点のある卵を4個産む。卵はとがったほうを中心にして十字花型に並べられている。

5，6日で産卵が終わり、雌が抱卵（ほうらん）を始めるが，最初の1週間は落ちつかず、巣をほったらかしにしては隣の雄のディスプレーを見物にいったりする。2週めからは本格的な抱卵にはいるが，雄もときどき交替している。抱卵期間は24～27日で、とくに気温が低かったりすると31日ぐらいになることがある。ひながかえると、親鳥は卵の殻をすぐに取りのぞいてしまう。

やがて、ちらほらと植物のはえている泥地のなかに、母親に連れられたひなの姿が見られるようになる。黒い斑点のある茶色っぽいひなの羽毛は、周囲の環境と溶けあってほとんど目だたない。ひなはその小さなあしですばやく走り、危険が迫ると地面に張りついてしまう。夜は母鳥のつばさの下で眠る。ひなが飛べるようになるまでには約5週間かかるが、母親はあたたかく見守り保護する。この間、雄は周囲を見張る役をつとめる。

ひなが飛べるようになるや，家族は沼地をあとにする。移動が始まるのだ。旅の間，あちこちに長々と逗留しながら，だんだんと南部に下っていく。気候が不順だと、冬じゅうほうぼうをさすらい歩き、スペインやイタリア，はては北アフリカにまで南下することがある。2月の終りころから再び北のほうへ引き返してくる。

タゲリの仲間

タゲリの仲間は種類が多く、チドリ科のなかでは優美で変わったものが含まれる。これらの鳥は，かつてたくさんの属に分けられていたが，最近はみなケリ属に属するものとして扱う場合が多く，24種がある。

ケリ *Vanellus cinereus*（ケリ属）は，全長が34～38センチ、体重は380グラムを越え、チドリ科の鳥では最大のもののひとつである。頭部はスレート色、背中は灰褐色、下胸に黒褐色の帯があり，腹は白い。尾羽（おばね）も白く，その先端近くに黒色の帯がある。くちばしの半分と目の周囲は黄色く，目先に黄色の小さな肉垂（にくだれ）がある。

アジア東北部の特産種で，モンゴル，中国の北部から日本で繁殖し，冬には中国南部，東南アジア，インドなどへ渡る。日本では本州の北部，中部の水田で繁殖し，西日本では冬にも見られるから漂鳥である。冬は10～30羽の群れで，おもに刈り入れのすんだ水田や干拓地にすんでいる。警戒心が強いが，タゲリほどではない。

繁殖は，春早く2月ころ始まる。巣は，他のチドリ科の鳥と同じく，地面の凹みに枯れ草や小枝を敷くだけの簡単なもので，3月の終りころまでにふつう4卵を産む。卵は灰褐色の地に黒褐色の斑点がたくさんある。抱卵は雌雄交替で行ない，その期間は27～30日くらいである。

セクロツメバゲリ *Vanellus armatus*（ケリ属）は白と黒の美しい鳥で，額，後頸（こうけい），雨覆（あまおおい），肩羽（かたばね），腰，腹などは白か灰色で，他の部分は黒く，虹彩は赤い。冠羽はなく，翼角部（よくかくぶ）につめがある。

アフリカ南部の特産で，ケニアおよびコンゴ以南のアフリカに分布する。開けた草原地帯にすみ，浅い水たまりの縁に20～30羽の群れでいることが多い。非常に臆病な鳥で，見知らぬものが近づくとすぐ叫び声をたてて飛びだす。そのため，この鳥がけたたましく逃げだすのを合図に，他の鳥や獣たちも警戒を始めるといわれている。



ムナグロ　チドリ科ムナグロ属。
繁殖期に胸がまっ黒になるのでこの名がある。
日本では旅鳥として春と秋に見られる。
飛んでいるとき　キヒー，キビー　と鳴くので
“キビキビ”と呼んでいる地方もある。
撮影　[illegible]

ムナグロ *Pluvialis dominica*

ムナグロ（ムナグロ属）は全長が22～26センチ、体重が約200グラムである。羽色は夏羽（繁殖期）と冬羽ではっきり違い、繁殖期のものは、黒褐色の背面に黄金色の小斑が一面に散らばっていて、額と眉と頸側（けいそく）は白、目から下の顔面とのどから腹にかけては黒い。ムナグロ（胸黒）の和名は、この胸が黒いことに由来する。冬羽は全体に黄色っぽく、下面も黒くない。

ムナグロはシベリア東部、ベーリング海の沿岸とアラスカ、カナダなどのツンドラで繁殖し、冬には東南アジア、フィリピンからニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドに、また、南アメリカのアルゼンチンにまで渡っていく。

日本では旅鳥として、春と秋の2回にたくさんのムナグロが渡来する。渡りの途中には、5～20羽くらいの群れでいて、昼間は海岸の干潟や、海岸近くの水田でえさをあさり、夜間に旅行する。

ムナグロは、繁殖地では非常に敏捷で臆病なため、観察がむつかしい。ツンドラの荒地をすばやく走りまわり、巧みに人の目からのがれてしまうのである。飛ぶのもたいへん速く力強い。舞いおりるときも、速いスピードで地上低く旋回しながら、そこがじゅうぶんに安全な場所であることを確かめてから着陸する。



食べ物は時期によって異なるが、昆虫とその幼虫、ミミズ類、甲虫類が主で、小さな軟体動物、エビやカニなども見つければ食べる。夏にはとくに、直翅目（バッタなど）や双翅目（ハエ・アブなど）の昆虫の幼虫を多く食べる。また、ツンドラの植物の実も食べるようだ。これらのえさは、ほとんど地上でとる。

巣はツンドラの荒地のなかにある。雌が地面に浅く凹みを掘り、そこにわずかの小枝や草を敷く。1腹の卵数はつねに4個で、卵は薄茶か薄緑色をしており、焦茶の斑点や模様がある。雌雄交替で、27～30日間抱卵する。ひなはチドリ科の他の鳥のひなと同様に、孵化して数時間たち、羽毛がかわくと、親につ





ヨーロッパムナクロ。チドリ科ムナグロ属。
繁殖地ではすばしこく，しかも臆病なので
観察するのが非常にむつかしい。
ヨーロッパと西シベリアのツンドラで繁殖するが
キツネなどの天敵も多く，油断ならない。（上）
PH. E. HOSKING

フタオビチドリ *Charadrius vociferus*。
チドリ科チドリ属。
北アメリカの大平原に生息している。
くびと胸のところに平行して走る黒い輪が特徴。
鳴き声から《キルディアー》とも呼ばれる。（下左）
PH. E.P.S

メダイチドリ。チドリ科チドリ属。
夏羽にくらべるとややじみな冬羽だが
鏡と化した水面にそっとたたずみ
自分の姿を写してみようとしているのだろうか。
あしもとから立つ水紋がうらめしい。（下右）
撮影 高野伸二



いて歩くようになる。そして、少なくとも4週間くらいは親の保護を受ける。

ツンドラには、ムナグロをねらう動物がたくさんすんでいる。巣のなかの卵にはカラスやカモメが、ひなにはキツネやシロテン、ハヤブサなどがたえず目を光らせている。だから人のいない荒地にすんでいても、まったく油断できないのである。

ヨーロッパムナグロ *Pluvialis apricaria*（ムナグロ属）は、ムナグロにきわめてよく似た鳥だが、全長が27～29センチと少し大型である。また肩の部分が灰色をおびている。

ヨーロッパとシベリア西部のツンドラで繁殖し、一部は留鳥（りゅうちょう）であるが、他のものはアフリカやアゾレス諸島に渡って越冬する。

タイセン *Pluvialis squatarola*（ムナグロ属）は、ムナグロに似た鳥で、繁殖期（夏）には、目から下の顔とのどから腹にかけての部分が真っ黒になるが、背中の斑点は黄金色ではなくて白く、全体に白っぽい。全長は30～32センチ。北極圏のツンドラで繁殖し、冬にはヨーロッパをへてアフリカ、マダガスカルに、またアジア中部をへてインド、インドシナ半島、マレー諸島、オーストラリアに、あるいは北アメリカから南アメリカに渡って越冬している。

日本では旅鳥で、春と秋の2回渡来し、海岸近くの水田で見かけられる。

コチドリ *Charadrius dubius*

コチドリ（チドリ属）は全長が約16センチ、体重40～45グラムと小型の鳥である。羽色は背面が灰褐色、顔の下半分が白い。額も白いが、過眼線と額の白色部を分ける太い線は黒色である。また、胸のところにはっきりした黒いくび輪がある。

コチドリの分布域はきわめて広く、ヨーロッパのほぼ全域（北極地方を除く）、アフリカ北部、アジアの大部分、およびニューギニアで繁殖する。熱帯地方以外のものは渡り鳥か漂鳥で、冬になるとアフリカや東南アジアに渡って越冬する。

日本では全国各地で繁殖し、とくに北海道と本州ではふつうに見られる鳥である。冬は南方へ渡るものもあるが、四国や九州の暖かい地方で越冬するものもあるようだ。

ほとんどの場合、海岸の砂浜と内陸の湖のほとりや川原にすんでいる。繁殖期にはつがいでいるが、それ以外のときは小さな群れで生活している。この鳥は、地上ではなかなかすばしっこい

食べ物は、地上や浅い水たまりにすむ昆虫

シロチドリ（チドリ科チドリ属）
日本ではもっともふつうに見られるチドリだ。
和名のシロチドリ（白千鳥）は
からだの色が白っぽいことからきている。
「ピュル」とか「ピリッ」とかいう声でよく鳴く。
PH. F. MEL G. VIENNE JACANA





やその幼虫、それにカタツムリや他の小型の軟体動物である。また、多量の水をしばしば飲むので、水のまったくないところにはすんでいない。

巣は簡単なもので、雌が地面の砂利を掘ってつくった凹みである。5月の半ばに、4個の卵が産み落とされる。卵はクリーム色で、褐色や灰色などのごく小さなしみや斑点が散在しているので、周囲の砂や小石と見分けがつかないほどだ。また、卵は決まってとがったほうを中心に、十字花型におかれている。

抱卵期間は24～26日で、雌雄が交替で行なう。ひなは、卵からかえって羽毛がかわくと、すぐに親鳥といっしょに巣を離れる。親鳥はひなが飛べるようになるまで、3週間くらい子どものめんどうをみる。

イカルチドリ *Charadrius placidus*（チドリ属）は、コチドリにとてもよく似ているが、



抱卵するコチドリ（チドリ科チドリ属）
ふつう海岸から離れた湖や川のほとりに営巣する。
1腹の卵数は4個で、褐色の斑点がたくさんある。
[illegible]や他の動物が巣に近づくと
巧みな擬傷で注意をそらせ、卵やひなを守る。
PH. J. GOOD (N. H. P. A.)

ダイゼン（チドリ科ムナグロ属）
[illegible]は、しばしば他の[illegible]
[illegible]の群れをなしている。
写真の鳥は、[illegible]ダイゼンで、
[illegible]のはオオソリハシシギ[illegible]
撮影 [illegible]



全長が20～22センチでずっと大型である。また，額の白色部はコチドリより狭く，過眼線もコチドリのようにまっ黒ではない。

アジア東北部の特産種で，中国の北部から朝鮮，日本で繁殖し，冬は中国南部，東南アジア，インド北部にまで渡る。しかし，東京から西日本にかけては，真冬でもふつうにこの鳥をよく見かけるから，漂鳥のものもあるようだ。

生息場所はだいたいコチドリと同じであるが，繁殖期には海岸や河口で見ることは珍しく，ほとんどが海から離れた川の中流以上や湖の岸べで営巣する。繁殖期は，4～7月である。

冬にはふつう5～20羽くらいの小さな群れで，川原や水田，畑地などでえさをあさっている。からだが大きいせいか，歩き方はコチドリほどせわしげではなく，鳴き声も太い。

シロチドリ *Charadrius alexandrinus*（チドリ属）は，日本ではもっともふつうに見られるチドリで，全長が約18センチ，コチドリとイカルチドリの中間くらいの大きさである。羽色はコチドリやイカルチドリに似ているが，からだが全体に白っぽく，黒いくび輪も不完全である。和名のシロチドリ（白千鳥）は，この色の白っぽく薄いところからきている。鳴き声は「ピュル」あるいは「ピリッ」などと聞こえ，地上にいるときも飛んでいるときもよく鳴く。

シロチドリは，北半球の温帯地方から南半球まで広く分布し，おもに海岸地域にすむ。日本では北海道から琉球列島までの全国各地にすみ，漂鳥で，ほぼ1年を通じて見られる。

海岸や河口の砂浜を好み，河川の中流以上ではほとんど見られない。巣はコチドリと同様に，砂礫地に凹みを掘ってつくり，4～7月の間に3卵を産む。食べ物や習性も，コチドリとだいたい同じである。秋になると河口部の砂浜に集まって，数百羽の群れをなしていることがある。

日本で繁殖するチドリ属の鳥は，以上述べたコチドリ，イカルチドリ，シロチドリの3種であるが，そのほかに，春秋の渡りの途中，各地の海岸や水田を訪れる次の種がある。

メダイチドリ *Charadrius mongolus* は，シロチドリより少し大きく，中央アジア，チベットからシベリア東部，アムール地方，カムチャツカまでで繁殖する。シロチドリに似ているが，夏羽では胸と眉線が赤錆色になって美しい。

オオメダイチドリ *Charadrius leschenaultii* は，カスピ海，中央アジア，モンゴルなどで繁殖する。メダイチドリより大きく，胸と眉線は淡い赤錆色である。

ハジロコチドリ *Charadrius hiaticula* は，おもにユーラシア大陸の北極圏のツンドラとグリーンランドで繁殖する。日本では迷鳥として，数回観察されたことがあるだけだ。



抱卵するシロチドリ。
海岸や河口の砂地に好んですみ
巣は砂地に掘った簡単なくぼみである。
1腹の卵数は3個。4～7月にかけて繁殖する。
秋になると数百羽の大群をなすこともある。
撮影 [illegible]

ハジロコチドリ。チドリ科チドリ属。
イカルチドリやコチドリに似ているが
くちばしのつけ根のほうの半分が
あざやかなオレンジ色をしている。
日本では，迷鳥として数回観察された。（上）
PH. MARKHAM

カラーページ解説

雪国のタマシギ

上木泰男

日本にすむタマシギは，おもに南日本を中心に分布する。北日本ではほとんど見られず，太平洋側ではだいたい茨城県あたり，日本海側では雪深い新潟県あたりを生息の北限としている。北へいくほど個体数は少ないが，北海道の函館市で捕えられたこともある。

北陸地方では富山，石川，福井の3県ともに生息するが，その数や繁殖例は，南にいくほど多くなっている。なかでも，筆者の住む福井県では個体数も多く，繁殖例も古くからよく知られており，雪のなかに越冬する事実も確認されている。筆者は，1965年ころから現在にいたるまで，福井県内を中心にタマシギに関する調査研究を続けてきた。ここでは，今までに判明したタマシギの，1年を通しての生態観察を中心に述べてみたいと思う。

県内でのおもな分布域は，越前平野北部の坂井郡芦原町，三国町の一部，さらに南越地方の武生市，鯖江市，丹生郡朝日町，清水町などである。ここでは南越地方の調査によるものを中心に紹介していきたい。

早春のタマシギ

福井県地方では，平年2月下旬から雪が少なくなり，たとえ降っても平野部では日中の気温が上がるため，根雪になることは少なくなる。このころになると，10羽前後の群れ（雌雄の混群）をなしたタマシギが，川岸のいちはやく雪の解けた部分でえさをあさっている姿をよく見かけるようになる。そして，暖かい日が続くにつれ，雪解け水に追われるようにして川を去り，付近の水田や休耕地，埋立地などに移動を始める。早いものは3月下旬から4月上旬に，つがいになって湿地に現われる。なかにはこのころすでに，雌のくちばしの先端部がいくらか赤くなっているものもあるが，多くの個体はまだ発情期にはいっていない。4月の中旬になると急に個体数が多くなり，これからかれらの繁殖シーズンが始まる。

繁殖シーズンの幕明け

4月の半ばころから，水田のいたるところで荒起こし作業が始まり，農夫の姿もあちこちで見られるようになるが，タマシギは農夫のいないときを見はからい，とくに朝早く，頻繁に姿を見せるようになる。

雌のさえずりが始まるのもこの時期である。夕暮れに近い4時過ぎころから，夜の9時，しばしば11時ころまでしきりに鳴く。晴天の日は鳴きはじめる時間帯がおそいが，曇天，雨天のときはやや早くなり，昼間でもさえずることが多い。

鳴き声は，からだの大きさに似合わず大きく，かなり遠くまではっきり聞こえる。場所によっては，1キロ四方まで聞こえることもある。雌の発するこの鳴き声は，「コー，コー」または「コーコー」とも「コッコー」とも聞こえる。近くで観察すると，この呼気による発声音のまえに，やや細い声で一種の吸気音とも聞こえる「ウッウウー」または「ウフーウー」と低い音を数回発する。しかし，その吸気音がまったくないこともあり，呼気音も長いときには20〜50音節も続くことが確認された。前奏とも思える，低いうなり声に似たこの音声は，何を意味しているのか興味深く，今後のいっそうの調査，研究に待ちたい。


しきりにディスプレーする雌　1971年7月朝日町にて

筆者は，すでにつがいになっている雌より，あぶれている雌の個体のほうがよくさえずるという事実も確認した。一方，繁殖期の雌が，飛行しながらさえずっていることも3回ほど確かめている。

このさえずりのシーズンには，雌が雄に向かってしきりに試みるディスプレーも観察される。その行動形式については，小林平一氏（1955年，『鳥』第66号）も述べておられるとおり，突然立ちどまって両翼を開き，それを真上にさし上げて，そのままの姿勢でときどきつばさに力を入れて背のびするようにしゃくり上げながら，異様な鳴き声を発するのである。このディスプレーは，比較的開けた場所で，しかも大胆に行なわれるので，非常に華美で印象的である。このとき，つばさの玉の模様が実にはっきりと観察される。このディスプレーは，夕暮れどき，まわりがかなり薄暗くなったときに行なわれることが多く，その撮影のチャンスは非常に少なかった。


↑早朝か夕暮れの薄暗いときもっともよく鳴く　1972年5月朝日町の休耕田で


↓孵化後2時間たらずのひなと雄親　1972年8月鯖江市内にて

この時期に前後して，雄による巣づくり活動が始まる。巣がつくられる場所は，休耕田の稲株のあいだなどがもっとも多く利用され，あぜの上などがこれに次ぐ。また珍しい例としては，水を引いた苗代のほぼ中央部に，そまつな巣材を使って営巣した例（吉村信紀氏による愛知県下の例）も知られている。

巣材はおもに，水田に放置された切りワラ，禾本科植物の枯れ葉などが使われ，地表から5〜15センチくらいにまで積みあげて，その上部を皿状にし，そこを産座にしていることがもっとも多かった。筆者の観察例のなかでは，地表25〜27センチ近く積みあげられているものもあった。

たえずじめじめしている感じの産座の上には，ふつう4卵が産みおとされる。昨シーズン（1972年），筆者が調査した16例（巣）のうち，14例までが4卵であった。その卵の配列のしかたもほぼ一定しているようで，卵のとがっているほうを中心にして，ほぼ十字型に並べられて

→＊

カラーページ注

〔注1〕 **敵に対する協同防衛の行動**

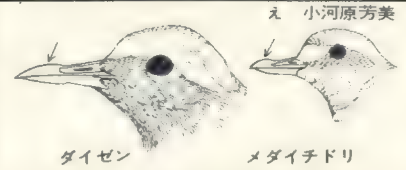
鳥類は，小鳥であっても，敵が巣に近づくと，激しく威嚇の動作を示したり，攻撃をかけてくる。とくに集団で繁殖する鳥たちの場合，1羽が敵を発見し，舞いあがって騒ぎはじめると，すぐ周囲で繁殖している鳥全部が飛びたって攻撃をしかけたり騒ぎだしたりする。卵やひなをねらってコロニーに近づいたカラスやタカなどが，たくさんの鳥に追われて逃げだしていく光景は，繁殖期にはしばしば見られる。

鳥が集まってコロニーをつくり，繁殖することの利点のひとつは，つがいで生活している場合より敵をいち早く発見できる機会が多く，また敵を発見するとその場にいあわせた鳥全部で敵にあたり，1対1ではとてもかなわない敵を追いはらえることだろう。その点では，こうした行動を協同防衛と呼んでよいだろう。

しかしよく観察してみると，卵やひなをもっている親たちは，仲間の警戒を聞くとすぐに飛びだしてくるが，盗まれる卵やひなのない鳥は比較的無関心であり，ときには自分が攻撃を受けそうになるまでなんの反応も示さない。したがって結果的には，みなで敵を追いはらうことになるのだが，それぞれの親鳥は単に自分の卵やひなを守るために騒ぎたてているにすぎない，という見方のほうが妥当であろう。［8ページ右］

〔注2〕 **チドリ科とシギ科の区別点**

この2科を区別するのに，もっともよい外形的特徴は，くちばしの形状と羽色のパターンである。チドリ科の鳥は，くちばしが図に見られるように，先のほうではっきりふくらんでおり，羽毛のパターンでは顔，胸，尾先の近くに顕著なマークや帯がある。くちばしの先端のふくらみがなんに役だつかは明らかでないが，頭部や胸のマークは，そこに敵の視力をひきつけ，からだの輪郭をくらます効果がある。



え　小河原芳美

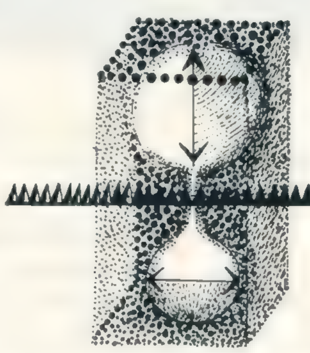
くちばしと羽毛のパターンの特徴は，ひなにおいても顕著であり，これにより分類した結果は，内部形態により分類した場合とほぼ完全に一致する。だから，これらの特徴は，一般的な外観や習性より，ずっと重要な科の区別点であると考えられる。［20ページ左］■（森岡弘之）

生きものの世界への疑問 6

プラスアルファの考え方

日高敏隆

偶然的な突然変異によって新しい種ができる可能性が，一般的に想像されているのよりずっと低そうなことは，前回に述べたとおりである。それは一連のきわめて多くの難点を乗りこえてゆかねばならない。そして事実，キイロショウジョウバエ（*Drosophila melanogaster*）という種の何百という突然変異は，今のところすべてキイロショウジョウバエの種のワクのなかにとどまっているようであって，これを乗りこえて別の種，たとえばクロショウジョウバエ（*D. virilis*）のワク内へ乗りこんだもの，つまり，クロショウジョウバエになったものは，ひとつとしてないのである。



このことは，たいへんよく似ていて専門家でなければちょっと区別のつけにくい種のあいだを含めて，どの動物の種についてもいえる。どれほどよく似た種のあいだでも，突然変異によってそれぞれのワクを乗りこえることは，少なくとも今までのところは不可能だった。

もちろん，今までに知られている品種と同じタイプの突然変異が生じてくることはある。しかし，それはあくまで同じ種のなかでの〝品種〟のあいだのことであって，種のワクが乗りこえられたということではない。

遺伝学の話のなかで例にあがるのは，メンデルのエンドウマメでもモーガンのショウジョウバエでも，その大部分が同じひとつの種のなかの〝品種間〟での問題である。集団遺伝学の場合でも，それは同じであり，ひとつの種のなかでの異なった遺伝子の動きを論じているのがふつうである。

ただ，植物の場合には少し違う例がみられるようであり，ある植物の突然変異個体が新しい〝種〟のもとになったということが書かれているときがある。しかし，こういう場合について，その当否を深く論じていくと，だんだん話があいまいになっていって，その新しい種というのがほんとうに新しい〝種〟なのかどうか，よくわからなくなってしまうようである。したがって，とにかく突然変異によって，確かに新しい品種はできるが，新しい種ができることはたいへん困難であるようにみえる。

〝新しい品種〟のゆくえ

そこで，突然変異によって進化を説明しようとするのなら，そこで生じた新しい品種が，いずれは新しい種になるのだと考えねばならぬことになる。それは容易なことではない。新しく生じた品種は，まだ同じ種のなかにあるのだから，古いものとどんどん交雑し，品種間雑種をつくっていく。その結果，変異によって新しく生じた遺伝子はその種のなかにばらまかれていき，その種のもつ遺伝子のレパートリーはどんどんひろがっていくが，新しい種が分離してくることはない。

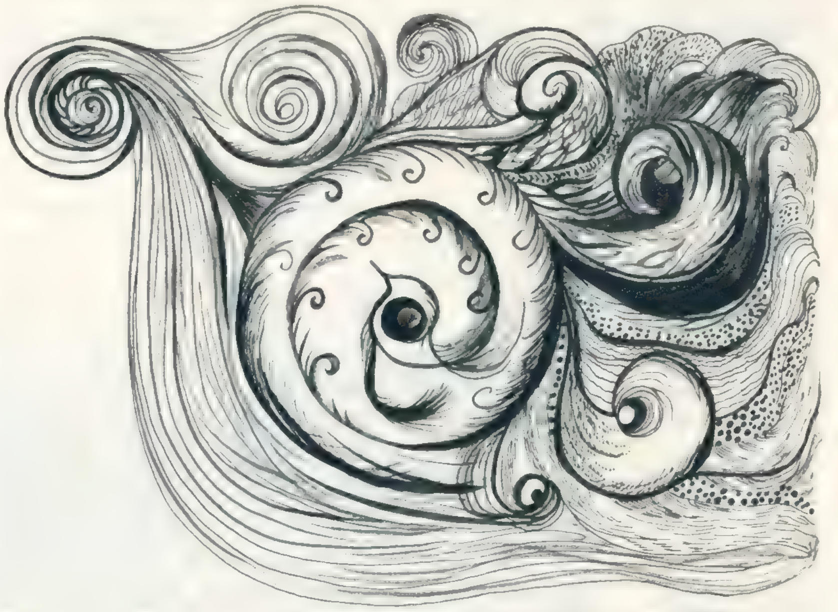
そこで隔離ということが重要な要因として考えられることになる。つまり，たまたま離れ島などで突然変異を起こした個体が生ずると，その変異はその島のなかだけにしかひろがらない。そこで，たまたまその変異が〝適応的〟であったとすると，その変異は急速にその島のなかに広まっていき，ついにその島には変異した〝新しい〟個体ばかりとなる。すると，この島には他の土地とは違う〝新しい〟品種が生じたことになる。

これはまだ新しい〝品種〟にすぎないが，長い年月の間，この島が離れ島でありつづければ，つまりこの新しい品種が〝隔離〟された状態でいつづければ，さらに次々と突然変異が積み重なっていって，〝ついには〟よその土地のとまったく違う新しい〝種〟になるだろう，というように考えるのである。

それはありそうなことである。事実，有名なガラパゴス諸島やハワイ諸島をはじめとして，離れ島にはよそに見られぬ特別な種がいることが知られている。

また，こういうことも考えられる。隔離が起こらなかった場合でも，自然淘汰の際に有利な突然変異が，次々とその種全体にひろがっていき，長い間にはその種の遺伝的形質がむかしとはまるで違ってしまうこともあるだろう。そうなれば，ひとつの種はしだいしだいに変化していって，気がついてみたら，いつのまにか別の種になっていた，ということになるかもしれない。

この後者の可能性がほんとうにあるか



カラーページ解説

＊ ——→

いるが，1卵だけは横向きになっていることが多かった。その横向きの卵は，他の3卵にくらべて少し小型であり，軽いことも測定例からはっきりした。しかし，なぜそうなのかということについては，まだ調査の余地がある。

卵は，雄によって抱卵されるが，そのあいだ周囲の植物は生長を続け，巣はだんだんに草に隠されてわかりにくくなる。しかし，抱卵が最後まで行なわれることは少なく，途中で発見されたり，水田を掘り起こしたりされることがほとんどで，孵化にまでこぎつけられることは意外に少ないのが現状である。

巣が完成し，卵も産みおえられた巣の近くからは，まもなく雌の姿が消える。そして，そこから遠くないところで，雌と別の雄とがいっしょにいるのが見られるようになる。ひとつの巣が発見されると，その近くに必ずひとつかふたつの巣が発見されるのがつねであって，巣は近いものでは4メートル，遠いものでも25〜40メートルくらいしか離れていないところにあった。

一妻多夫説のなぞ

筆者の観察した例では，はじめの雄と2番めの雄とははっきり個体識別できたが，雌については同一個体であるという確証はついにつかめなかった。1羽の雌の成鳥が，はたして何羽の雄と交わりをもつかについては，今後個体標識やテレメーターの利用などにより明らかにしていかなければならない。ともあれ，一妻多夫の関係については，やはり一種の疑念が残るように思う。

18〜19日の抱卵ののちに孵化するが，ひなは，卵殻が割れて約30〜50分くらいで羽毛（うもう）の一部がかわきはじめ，約2時間で乾燥し，立ちあがって独力で歩きだす。1卵が孵化してから次の卵が孵化するまでには，長いものでは2昼夜前後かかった例も観察された。先般豪雨のために冠水した1巣の4卵を調査した結果，もっとも早い個体とおそい個体との差は，発生上明らかに2，3日の差があり，4卵中最小の横向きのものがもっとも発生が遅れていた。

孵化したひなは，雄によって約40日間手厚く養育されて，親とほぼ同じ大きさにまで成長し，秋を迎える。

長い繁殖期間

かれらの繁殖期は，9月下旬ころまで続く。おそい記録としては，8月19日に卵のままのものが確認されたが，文献によるともっとおそい例もある。

この繁殖期の延長は，長い繁殖期の間に，農作業で湿田が埋めたてられたり掘り起こされたりして，繁殖が中断されることが非常に多くあり，それによってかれらの生活のリズムが狂わされることにもよると思われる。

幼鳥は，はじめ親といっしょにいるが，ほどなく幼鳥どうしの群れをつくり，水田や小川，排水溝などに姿を見せるようになる。このころ小規模な渡りが

どうかについては，いろいろと論議がたえないが，人類の進化にもそのようなことが起こったと考えている人もある。

〝時の流れ〟の比重

突然変異と自然淘汰による進化の説明には，ほかにもいくつかのことが想定されている。地球上の気候変化は，自然淘汰の方向や，淘汰の力（淘汰圧）の大きさを変えるので，もちろんたいせつな要因となる。

けれど，いずれにしても，これには長い時間がかかることが前提とされている。〝長い時間がたつうちには，きっと……〟という考え方なのである。確かに進化には，何百万年，何千万年，いや何億年という，われわれの想像を絶する莫大な時間がかかっている。だから，そのあいだにはいろいろなことが起きそうである。だが，前にも述べたとおり，100万年というのだって 10^6 年，10億年といったって 10^9 年にすぎないのだ。時間だけをたよりにしていいものであろうか？

あまり簡単に疑問を投げてはいけないかもしれない。たとえば，脊椎動物の血液色素であるヘモグロビンはかなり複雑なたんぱく質であるが，それを構成しているアミノ酸の並び方は種によって違う。そこで，ある動物のヘモグロビンが別の動物のヘモグロビンに変化するには，どれくらいの時間がかかるかを計算してみるというような研究がいろいろ行なわれ，興味深い結論が得られている。だから，ある時間がたつうちには，かなりの変化が起こりうることは確かなのだ。

〝付加〟が新種を生むか

けれど，あえてぼくがこのことを問題にするのは，そこに次のような疑問がつきまとっているように思えてしかたがないからである。

よく，〝サルは人間より毛が3本足りない〟という。これを裏返すと，人間はサルより毛が3本多いことになる。では，サルに毛が3本はえたら，人間になるだろうか？　つまり，サルに突然変異が起こって，3本毛がプラスされたら，人間という別の種ができるであろうか？



いうまでもなく，これはたいへんばかげた質問である。けれど，ここには，そういって一笑にふしてはすまされない本質的な問題があるように感じられる。それは，ある種に突然変異が起こって，新しい形質が〝追加〟されていき，それが〝蓄積〟すると，いつの日か新しい種ができる，というようなことが，はたしてあるのだろうか？という疑問だ。

サルと人間の違いは，毛の数だけではない。ほかにも数えきれないほどの違いがある。サルと人間というい方は乱暴だから，チンパンジーと人間（ホモ・サピエンス）とか，ゴリラと人間というようにいいかえても，本質的には何も変わることはない。そしてだいじなのは，チンパンジーとゴリラのあいだでも，まったく同じことがいえるということだ。チンパンジーはゴリラ・プラスアルファでもなく，ゴリラ・マイナスアルファでもない。くどいようだが逆にいえば，ゴリラはチンパンジー・プラスアルファではなく，チンパンジー・マイナスアルファでもなく，人間・マイナスアルファでもない。しかもゴリラ，チンパンジー，人間は，たがいに実によく似ている。それで話はこんがらがってくるのである。

突然変異が〝付加〟だというと，反論もでてくるだろう。たとえば，キイロショウジョウバエに無翅という突然変異がある。それは，本来ならはえているはずの翅がなくなってしまう突然変異なのだから，付加ではない，ということもできる。だが，それは初等数学の問題である。引き算はマイナスのものを加えることだ。つけ加わったものがなんであれ，それがある一定の〝本体〟に対する〝付加〟であることはまちがいない。その本体とはその種，今の例でいえばキイロショウジョウバエという種である。

キイロショウジョウバエのさまざまな突然変異のどれひとつとしてクロショウジョウバエになったことがないということは，キイロショウジョウバエという本体にいかに何かを付加してもクロショウジョウバエにはならなかった，ということである。

ふざけたたとえを借りるなら，飛行機は自動車に翼そのほかを付加することによって発明されたのでは決してなかったし，潜水艦は船がだんだん水に沈むようになった結果できあがったものではなかった。飛行機は空中に浮いて飛び，また降りること，そしてそのために滑走することというプランでつくられている。自動車は地上を走るというプランでつくられていて，空中に浮きあがることはかえって危険である。船は水上に浮かんで走るものであって，沈んではならない。そして潜水艦は沈みっぱなしではなく，水中に沈んで走り，また浮きあがることを要求されている。

このたとえがそのまま動物の世界へ投影できるかどうかはわからない。しかし，種が生存していくということと，こういう機械が機能していくこととのあいだには，予想外に大きな類似点と，論理的な共通点がある。

これら4つの機械がたがいに他のものへの単なる付加によってできあがっていないという例は，かなり暗示的である。種というものが，もし，既存のものへの付加によっては生じえないものであるのならば，突然変異の付加的な性格は，進化の議論のなかで，かなり重要な問題点となるだろう。■　（東京農工大学教授）

イラスト・重延瓔子

カラーページ解説

始まるものと思われ，まもなく個体数がめっきり少なくなる。11月～12月ともなると，観察例は激減する。

厳冬期の生活

11月下旬から12月初旬には雪が降る。タマシギは，休耕田の雪の少ないくぼ地などに，ときどき姿を見せるようになる。本格的な降雪期には，清水のわく水田や排水溝に，タシギ，タゲリ，クサシギなどの群れにまじってえさをあさっている。

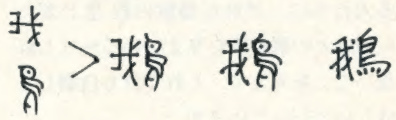
この越冬する個体数は，かなりな数になることも確認できた。厳冬期における最適の採餌場所は，やはり中・大河川の河岸で，水位の増減にともない，もっとも早く雪が解ける場所である。寒さがやわらぐ3月ころまで，こうした環境で越冬する。

農薬使用の手控えや，思わぬ生産調整5か年計画の実施による休耕田の増加が，一時的にタマシギの生活環境を救ったわけだが，もともと数が少ないものだけに，今後の消長が気がかりでならない。近年の相次ぐ土地改良事業計画によって，湿田の乾田化が急速に推進され，かれらの生活環境はさらにきびしいものとなるだろう。また河川の汚染が，かれらの採餌条件を悪化させていることも見のがせない。この休耕田の主人公的存在のタマシギの将来は，決して明るくないが，気長にかれらの動静を見守ってやりたい。■　（福井県立丹生高等学校教論）

撮影　筆者

漢字のふるさと　72

藤堂明保



鵝（ガチョウ）「鵝鳥」を音訳して日本語で，ガチョウと呼ぶようになった。「鵝」は唐代には nga，そののち nga→a→o→ə と変化したので，今の中国語では é と発音する。その羽が白いので，白鵝（bái é）と呼ぶこともある。

「鵝」は「鳥＋音符我」からなる字で，いうまでもなく，nga！ nga！という鳴き声を表わした擬声語である。ガチョウは，わりと警戒心が強い。見知らぬものが現われると，長い首を伸ばしていっせいにガアガアと鳴きたてる。イヌが吠え，ガチョウが鳴きたてることによって，村人たちはよそ者が村に現われたことを知ったものだ。だが今の中国では，その必要もなくなった。ガチョウの肉は大あじで，鴨子（あひる）に比べて見劣りがする。だから今の人民公社では，もっぱらアヒルの飼育に力を入れ，ガチョウはめっきり減ったようである。■



動物の飼育は是か非か

本誌88号「仲間のひろば」に東京の泉茂雄さん（18歳・学生）の〝動物を愛するとは？〟という投稿を掲載しましたところ，編集部と泉さんのところへ，たくさんの反響が寄せられました。

泉さんの意見の大意は「動物を愛するというのは，かれらに自然のなかで，自然の法則にかなった生き方をさせることだ。だからペットのような動物の所有には反対で，動物たちをただちに自然に返すべきだ」というものでした。

当然のことながら，賛否両論ありましたが誌面の関係から全文を掲載することはできませんので，いくつかの内容をご紹介します。



まず全面的賛成論では秩父市の武田進さんのお手紙がありました。武田さんは，人間と動物との関係は富める人と貧しい人との関係に似ており，力の強い者が自分につごうのよい解釈を力の弱い者に押しつけてすましている場合が多いと考えておられ，そこから動物の研究や動物園に対して疑問を投げかけています。

動物を理解するということは，なにもかれらをかごやおりに入れて見ることばかりではないし，動物園に一定の役割があるとしても，そこに世界じゅうの珍獣をみんな集めて見せる必要はない。むしろ，いきすぎた自然破壊をしないでおけば，身近にいくつもの動物を見る機会がじゅうぶんにあるはずではないかと武田さんはいっています。さらに動物の研究のためと称して野生動物を捕えたり，かれらの生活をさまざまな形で脅かしている人たちに，それが鳥獣の殺生と変わらぬほどの悪影響を与えているかもしれないことを考えて，くれぐれも自制してほしいといっています。



また西宮市の中学生・河合昌幸さん（14歳）は，アダムソン夫人が飼っていた雌ライオン「エルザ」の例を引きながら，人間にいったん飼われたものを自然に返すというのは実に困難だとして，現在飼っているのは人間が一生めんどうをみるとしても，これ以上，野生動物は1匹たりとも飼うべきでないと主張しています。

動物を飼うことに積極的な意義があるとの意見もあります。小平市の主婦・山口洋子さん（31歳）は，人間が動物によせる無私な愛情が基礎になってこそ，苦境に追いこめられている自然と動物を生きかえらせる道があるのだと考えておられるようです。教育が知識の詰めこみにばかり力を入れてきたため，情操面はまったくおろそかにされており，その結果，自然や動物を愛することを知らない人が実に多い現状を考慮すると，泉さんの意見は片寄った理想論で，むしろもっと人間と動物との心の交流の場をひろげるべきだ，という意見です。

小鳥商に勤めている枚方市の柿葉理一郎さん（20歳）もだいたい同じような意見です。その際，野生動物をとってくるなどはとうてい許されませんが，飼育に適したものとして人間の改良の手が加わっている動物なら，それを飼う意味はじゅうぶんあるはずと考えておられます。

また泉さんのところへのお手紙のうちにも，この限られた地球上で人間と自然が共存するためには，生物の改良育種などをはじめとして，人間がまだまだその知識を傾けなければならないことがあり，自然のままであればよいというものではないといった指摘がありました。

こうした反響を読んでいただいたうえで，もう一度，泉さんの現在のお考えをまとめてもらいました。しかし，これでもなお自然と人間をめぐる問題のごく一面が論議されたにすぎません。こうした論議がまた新しい局面へと発展することを，わたしたちもまた望んでいます。

（編集部）

再び〝動物を愛するとは？〟

多くの人の意見を知り，また自分自身でいろいろと考えたすえ，わたしの考えも以前よりは少し深まったようです。しかし，動物は自然に返さねばならないという点は，前よりもいっそう強調したい気持です。

わたしが，このように考えるようになったのは，いくつかの体験によってです。わたしは以前，多くの鳥を飼っていましたが，そのどれをとっても満足に育ったものはいないのです。全部，手乗りにしていましたので，飛んで逃げられたのが大部分でした。そしてはねを切って飛べないようにすれば，そのためにネコに食べられてしまいました。考えてみますと，これは不注意や不運といったものではないのです。



しょせん，大空を飛ぶ鳥を小さなかごに入れて飼うのは無理なのです。鳥に人間がどんなに，ぜいたくさせても，自然を見せれば鳥はそっちへひかれてしまうのです。そう思いあたってからは，ペットショップへいっても，おりの中のイヌやサルや鳥たちを，手放しにかわいいとはいえない気持になりました。ちっぽけなおりに閉じこめられ，自由を奪われているのを見ると，しぐさがかわいいだけに，かえってかわいそうでなりません。それをただ鑑賞用とか，自分たちがつくった居ごこち悪い社会の脱出のためにペットをもて遊び，しかもそれを動物に対する愛だと思いこんでいる人が，残酷で憎らしくも思えるのです。

わたしの〝ペットを自然に返せ〟という主張も，その行為だけとって短絡的にいっているのではないのです。その点，ことばが足りないために誤解されたかたもあったようです。

わたしがいいたいのは，〝動物を愛する〟という，その愛情の内容のことです。それは，単なる感情ではなく，無私の状態から動物のことを考えるということではないでしょうか。人間の欲は際限ありません。動物を自分の所有物にして満足したい，欲求不満をそれで解消したいとなると，そういうエゴイズムも美的にすりかえて，愛護とか情操というようなことになってしまいがちです。

こういうことも大量虐殺のむかしからくらべれば，ずっと体裁よくなっていますが，これはやはり人間の自分かってなエゴイズムでしょう。こんなことをもし今後も続けていると，自然の動物が全部人間の好きな形に変型され，かたわにされかねません。そして気にくわない顔つきをしたのや気味の悪い動物は，この世からなくなってしまいそうです。

動物園についても問題があると思います。子どもたちを今の動物園に連れていって，あの無気力で哀れな動物たちの顔を見せることで，どんな社会的教育的意味があるのでしょうか。ただ珍しい動物を見せるのはなんのためでしょうか。そんなことなら，道端や庭でパンくずなどをつついているスズメをながめさせるほうが，ずっと情操教育になると思います。動物園を全部なくすというのも問題でしょうが，現在の動物園はいきすぎのように思われます。

しかし，動物を愛するといっても，結局人間は動物を殺さなければ生きていけません。もちろんライオンも他の動物を殺すわけですが。その際，ライオンは他の動物を殺しつくしてしまっては自分が生存していけません。そのように，人間も適当な範囲で，必要な場合についてのみ他の動物を利用していけば，動物も人間も共存できるような均衡が保たれるのではないでしょうか。

医学研究などで実験動物を使うのは有用だと思うし，動物を的の代わりにして撃ったり，おもちゃ代わりにいじくるのは悪用だと思います。しかし，このようにはっきりした場合は，むしろ現実にはそう多くはないので，その判断の基準は各人が具体的なケースに当たって考えるしかありません。結局わたしがいいたいことは，自分の欲や社会の風習に惑わされずに，動物の身になってかれらのことを考えていきたいのだ，ということにつきます。かれらをかわいいと思うだけでは，決して動物の愛護にはならないのです。■　（町田市鶴間202・泉　茂雄）



裏表紙説明

ヒツジの親子　ヨーロッパの夏の高山はヒツジの天下である。ここにはえる若草は子ヒツジのよいえさになる。この地帯で飼われるヒツジは，メリノー種とレスター種を交配した毛肉兼用種が多い。この毛肉兼用種は，実利的であるとともに強健なので，山岳地帯で飼うのに適しているのである。

オーストラリアには，現在約1億2300万頭のヒツジが飼われているが，これは1778年にヨーロッパから輸入したのにはじまり，歴史は浅い。ヨーロッパでの飼育は紀元前6000年ぐらいまでさかのぼり，ある時期には草が食いつくされ，国土の荒廃を招いたほど多く飼われていた。したがって，メリノー種やレスター種に古い在来種を交配した，その地方特有の交配種も多い。ヨーロッパでは羊毛の採取より食肉を主にしているので，粗放な飼い方のできる在来種が好まれるのである。■

（宇田川竜男）

Ph. B. Losier

次号予告
2月28日発売



アオアシシギ

世界動物百科
102号　3／11

カラーページ

チドリ目
シギ科
ダイシャクシギ，チュウシャクシギ
オグロシギ，オオソリハシシギ
アカアシシギ，ツルシギ，タカブシギ
イソシギ，キアシシギ，キョウジョシギ

私たちの仲間

ピグミーと動物と（中） すばらしい狩人たち	酒井傳六
澄んだ歌声 アマゾン動物記 14	伊沢紘生
日本のシギ・チドリ類 1 カラーページ解説	高野伸二
生きものの世界への疑問 7 対立しない異端？	日高敏隆
漢字のふるさと 73 九宮鳥（きゅうかんちょう）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802
TEL. 093－531－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460
TEL. 052－231－8131

世界動物百科　通巻102号　昭和48年3月4日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ヒツジの親子　説明30ページ

雑誌06311-3/4